地に降りる者

美羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
地に降りる者

【Ｎコード】
Ｎ７５１９Ｋ

【作者名】
美羽

【あらすじ】
天使界でもっとも高い天使長という地位にいながら、大天使ルシフェルはなぜ魔界へ降りたのか？
彼の意図と、その本当の理由とは？
基本、女性向け恋愛モノ。
間違っても、生々しいバトルとかありません。

気持ちはどこにある？

「あ……。ルシ……フェルさま……もぅ……だ、め……」
重厚な扉の向こうから、漏れ聞こえる、なまめかしい声。
黒と白のメイド服に身を包んだ女は、中から漏れてくる女の喘ぎ声に、ドアのノブに伸ばしかけた手を止めた。
「がまんしなくても、大丈夫ですよ。イってしまいなさい」
女の上に組み伏しているであろう男が、優しい口調でそう言う。とぎれとぎれの熱い吐息交じりの女の声に反して、冷やかささえ感じるその慇懃無礼な、あまりにもあっさりした口調で。そして、絶頂を迎えた女の声だけが、廊下に響き渡った。

彼がこの部屋に女をつれこむのは、いつものことだ。
違うのは、相手の女だけ。
いつものことだとわかってはいても、彼が女をこの部屋に連れ込むたびに、――この部屋から女のあえぎ声が聞こえるたびに、胸の奥深くが苦しくなるのはなぜだろう。その正体を確かめようと、心の奥底へ意識を向けてみても、喉の奥のほうで詰まってしまい、やるせないむなしさだけがいつも残る。
チャッ。
そこへ、内側からドアが開き、その部屋の主が現れた。
「ミュウか。……どうした？」
胸の奥でくすぶっている思いに沈みこんでしまって、ここがどこだかも、本来の目的も忘れていた。
「あわわ……ルシフェル様――」
つややかな黒髪に憂いを含んだ菫色の瞳。すらりとした長い体躯。適当に羽織っただろうガウンから、胸がはだけて見えている。
見てはいけないものを見てしまったような気がして、ミュウは目をそらした。たまたま目を向けた先は、開いたドアの向こう、ベッ

ドの上に放心状態で裸体を投げ出している女が見える。
女神特有のゴージャスな威厳を感じられない。むしろ質素で素朴なイメージすら与える今日の相手は、おそらく天使だろう。
「どうした？　なにか用があってきたのだろう？」
ベッドで横たわっている女に気をとられているミュウに気がつきながら、ルシフェルはドアを開けたまま女を隠すこともなく、いつものようにからかうような瞳を向け、口の端で笑いながら声をかけた。
「すみません。立ち聞きするつもりは――」
あわてて否定するミュウが、ルシフェルにはおかしかった。こんな顔をされると、もっと苛めたくなる。
「別に、聞かれてもかまわん。なんなら、中に入ってきて鑑賞してくれてもよかったのだが？――くく」
いたずらに輝く瞳にからめとられてしまったミュウは、こんな時はいつも何と返事をすればいいのか、困ってしまう。もちろん、ルシフェルはミュウのその反応を楽しみにしているのだから、返事など必要ないのだろうが。
「……で、用件を聞こうか？」
自分の企みがうまくいったかのようにくすりと笑って、ルシフェルは促した。
「あ……はい。あの……本部から連絡で、至急ルシフェル様においでいただきたいとのことでした」
ミュウは、ルシフェルの顔をまともに見ることもできず、足元を見ながら用件のみさっさと伝える。
「……。わかった。すぐに用意する。――ああ、悪いが風呂の準備してくれ。女の匂いをぷんぷんさせていくと、あのジイ様たちうるせぇから……」
ふわりと頭に載せられた大きな手の感触にびっくりして視線を上げると、息がかかりそうなほどの至近距離にルシフェルの顔があった。そしてゆっくりと近付いてきて――。

「お返事は？」
耳のすぐそばで、優しく空気が揺れた。
「あ――。……はい」
ミュウは、耳の端まで真っ赤に染めて再度うつむくことしかできない。
「よし。いい子だ」
いつものことだが、そんな風に至近距離でほめ言葉を囁かれると、何も言えなくなってしまう。
ミュウはうつむいたまま小さく「失礼します」と声をかけ、湯殿のほうへ駆けだした。

浴槽にお湯をためながら、先ほどのことが頭の中から離れない。
ミュウは、彼が部屋で女たちと何をしているのか、わからないわけではない。
ルシフェルは天使界一の、いや、この世に存在するものの中で一番美しく魅力的な天使だ。天使長というだけあって、ほかの天使からは尊敬され、頼りにされている。おまけに頭も切れるし、本部の長老方からの信頼も厚い。寄ってくる女を片っ端から自分のものにする点を除いては、全てにおいて完璧な天使であった。
そんな彼に抱いてほしいと思う女は数えきれない。天使のみならず、女神までも。来るものは拒まずなので、必然的に毎回違う女をつれこんでいるということになる。
しかし、一緒に住んでいて冗談で腕を腰に回されることはあっても、ミュウはルシフェルにあんな風にベッドで抱かれたことはなかった。
――私は……ルシフェル様にあんなこと、されてみたいのだろうか？　ルシフェル様に抱いてもらえれば、彼女たちと同じように、深い満足感を得られるのだろうか？
と考えることもある。特に、ルシフェルが女を抱いたという事実を知った後には、いつもと言っていいほど。ただ、相手はルシフェ

ルでないといけないのか、それとも、誰でもいいのか、自分でもわからない。少なくともミュウの中では、ルシフェルが女を抱くところを想像するのが、一番簡単だというだけなのかもしれない。

抱いてほしいと願えば、ルシフェルならそうしてくれるだろう。けれど、ミュウにとって、ルシフェルは少なくとも上司。自分からそんなこと、言えるはずもない。でも、もしもその言葉を口にできたら――。

頭の中で繰り広げられるルシフェルとの甘い展開に、切ないため息が、思わず漏れる。

だが、ミュウにはひとつ気になる点があった。彼女たちは自分こそルシフェルの恋人だと思い込んでいるようだが、近くでいつも見ているミュウには、ルシフェルにとっての本命がその中にいるとは、どうしても思えなかったのだ。

行為の後、女たちが満足そうな表情で帰って行くのと反対に、部屋に残ったルシフェルはいつも何かもの足りない表情を見せる。ミュウは女が帰った後のルシフェルの愁いを含んだ雰囲気にいつもやるせなさを感じていた。

彼の部屋で行われているのは、愛を確認する行為。しかし、ルシフェルにとってはそこに自分自身が求める愛が存在しないことを証明するための行為なのかもしれない。

「どうした？　……悩ましげな表情だな――」

気がつくと、すぐ目の前に実物がニヤニヤしながら立っていた。

「ル……ルシフェル様！！」

ミュウは頭の中の妄想を急いでかき消そうとするが、素肌に一枚薄いガウンを羽織っただけではだけている胸元を見せられて、妄想はさらに加速しながら膨らんでいく。

「ふふ。……子供だと思っていたが――」

ルシフェルは、ミュウがまだ子供のころから一緒に暮らし、面倒を見てくれた。成長したとはいえ、ミュウのことは娘か妹くらいにしか思っていないのだろう。

そんな考えが心をかすめ、ミュウはつんと胸の奥にせつなさを感じた。
「――そんなに刺激的だったか？　誰かを思い出して熱くなるほど――」
「刺激的」とは先ほどの情事のことを指しているのだろうか。董色の瞳に甘いやさしさと口元に相手を苛める楽しさを浮かべて、ミュウを見下ろしているルシフェル。
その「誰か」が自分だと、彼はわかって言っているのだろか？
ミュウの頭の中では、本人を目の前にし、さきほどの妄想がさらに力を増して動き始め、何も言えない。
「……なんなら、オレが、鎮めてやろうか？」
ルシフェルの顔が近づいてくる。同じような状況は以前にも何度かあったが、ルシフェルの唇がミュウのそれに触れることはなかった。『今日こそ本気かも――』と期待に鼓動が大きくなり、身を縮めて目を閉じるのも、いつものことだ。
額に残る、やわらかく暖かい感触。そっと目を開けると、くす、としたり顔のルシフェルがいた。
「――そんなやるせねぇ顔、男に見せんなよ。……でないと、さすがのオレでも……保障できねぇ」
ルシフェルが一瞬見せた焦れるような瞳に、気が動転しているミュウが気がつくはずもない。
すっと、風が動き、ルシフェルの甘くてけだるいような香りが微かに鼻腔をつく。ミュウが振り向くと、その気配を背中で感じたルシフェルが、ガウンを脱ぎながら浴槽へと歩きながら声をかけた。
「……ジイ様たち、至急でオレを呼び出したんだろ？　あんまり待たせるわけにもいかん。――着る物を用意しておいてくれ」
それでも、ルシフェルに心まで奪われてしまったかのように、ミュウはすぐに動けなかった。
「……それとも……一緒に入るか？」
顔を見なくてもわかる。いつもの甘く意地悪な瞳でミュウをから

かい笑っているのだろう。
「いえ。……し、失礼します」
顔を真っ赤に染めて、ミュウはその場を急いで出て行った。
ルシフェルも、ミュウの顔を見なくとも今どんな顔をしているかわかっている。ミュウをからかうのはルシフェルのいつもの楽しみの一つであるのだから。
しかし、そんなときいつもその視線に甘い優しさが含まれているとは――、しかもその視線を送る相手がミュウだけだと、ルシフェル自身は気付いているのだろうか。

ルシフェルの執務室で白い制服を準備しながら、服に残るルシフェルの香りにミュウは、先ほどのことを思い出し、一人で赤くなっていた。
「……ルシフェル様……」
もっと彼の香りに包まれようと、そっと制服に顔を埋める。そうしていると、まるでルシフェルに抱きしめられているような気がする。
がちゃっ。
不意に背後でドアの開く音がした。
「あわわ……ごめんなさい。今すぐご用意――」
ミュウは真っ赤になりながらあわてて制服から離れる。
「久しぶりだな、ミュウ。」
ルシフェルのとはまた違う、威厳のある声に振り返ると、柔らかくウェーブしている美しい金色の髪と意志の強そうなブルーの瞳の、リーダーの風格を携えた天使がそこに立っていた。
「――ミカエル様」
まるでその部屋の主であるかのように、堂々と入ってくるその人物は、ミュウの用意していた白い制服に目を留めすぐに状況を理解した。
「ルシフェルはこれから出かけるようだな」

白い制服はきちんとした場面で着る礼装だ。大天使であるミカエルも本部に呼ばれたときはそれを着る。
「あ、はい。――すぐお出かけになられます」
ルシフェル様の制服に顔を埋めていたのに気づかれていなければいいけど――。
ミュウはできるだけ平静を装って答えた。
「……。しばらく見ないうちに、きれいになったのは、あいつのせいか？」
焦れるような瞳で強く見つめ、ミュウに歩み寄るミカエル。これまでミュウが知っている柔らかい眼差しとは違う、意志の強い瞳で見つめられて、ミュウは思わず後ずさりする。
しかし、とん、と背が壁に当たりそれ以上逃げ場がなくなると、奇妙な沈黙が二人の間に流れた。
「……き、気のせいですよ――」
そのなんともいえない沈黙に耐え切れなくなったミュウは、目を逸らす。
「――なら、俺が入り込む隙は、まだあるわけだ――」
ミカエルは左手をミュウの頭の横の壁について、頤に右手をかけて自分に向かせると、再び甘い眼差しで彼女の視線を捕らえた。
この状況は、そんな経験が無いミュウにだって、なんとなく分かる。
しかし、艶やかにきらめく彼の瞳から逃れたいと思っても、頤を掴まれているので顔が動かせない。
ミュウは、どうしてよいのか分からずに、身を硬くした。
「――オレの執務室でオレの部下を口説くとは、いい度胸だな、ミカエル。……せめて、ドアぐらい閉めてからにしろよ。廊下まで筒抜けだ」
身動きの取れないミュウを救ったのは、戸口で呆れたように放たれた、艶のある声だった。
湯上りですこし上気した顔、黒い髪から滴り落ちる水滴、はだけ

た胸元。そして、口元には不敵な笑み。
その艶やかで色っぽささえ感じるルシフェルに、ミュウはまたもや動き出しそうになる妄想を何とか抑えなければならなかった。
「お前に言われたくないな。――実は、勤務時間中だというのに私の部下が一人見えなくてね。ここにお邪魔しているかと思って迎えにきてみたところだ」
焦れる気持ちを巧みに隠し、ミカエルは余裕の表情をまとってルシフェルに目を向ける。
今日の相手のあの天使はミカエルの部下だったらしい。ミカエルの瞳の底に少し怒りが混じる。勤務時間に持ち場を離れるということが、ミカエルには許せないのか、あるいは、その相手がルシフェルであるというところが許せないのか。
先ほど迫ってきたのも、その腹いせとったところだったのかもしれない、とミュウは思った。
品行方正で天使の鑑であるミカエルが、そこらへんの天使を口説くなど、どう考えても本気とは思えない。
「ああ、彼女ならまだ寝室にいるかもしれん。そっちへ迎えに行ってやればどうだ？」
ルシフェルのその挑発に、心を乱したのはミカエルだけではなかった。
ベッドの上に放心状態の天使が横たわっている先ほどの光景が脳裏を過ぎり、ミュウの胸の奥をぎゅっと締め付けるので、彼女はおもわず目をそむけた。
そんなミュウのささやかな変化をミカエルは見逃さなかった。
「……ああ。そうさせてもらうよ。――行こう、ミュウ」
心の奥を捕まれて動けないミュウの左腕を取り、ミカエルがミュウをドアのほうへ誘う。
「――え、あ……ミカエル様――？」
「――っ！　待て、ミュウはおいて行け！」
バタンッ！！

ミュウを連れたミカエルは、ルシフェルの声に重なるように、わざと大きな音を立てて執務室のドアを閉めた。

「……あの……ミカエル様、どちらへ？　寝室はこちらでは――」

ミカエルに引っ張られて歩いていたミュウは、甘い花の匂いが充満する庭に連れて出られて初めて、向っている先がルシフェルの寝室でないことに気がついた。

「――私の部下のことはいいさ。ふ抜けた顔してまどろんでいるところなど、私も見たくないし、彼女も見られたくもないだろうからな」

背丈以上に生い茂るバラの茂みの陰で、ミカエルはやっとミュウの腕を放した。

「――では、どうして……？」

ミカエルの意図がわからない。部下を探しに来たのではなかったのか？

「……こんなことなら、あのとき君をルシフェルに預けるんじゃなかった」

ミュウの問いかけには答えず、ミカエルは遠い昔のことを思い出しているようだった。彼女に背を向けて、忌々しげにバラの茎をもてあそんでいる。

「ミカエル様。ミュウは、幸せですよ」

ミカエルが何を怒っているのかわからないが、どうやら自分が関係しているらしいと思ったミュウは、感謝の気持ちをこめて笑顔で答えた。

「好きなんだろう、ルシフェルのことが？」

しかし、ミカエルの憤りはそんな言葉一つでは収まらない。

ぽきん。手に自然に力が入り、軽い音を立てて、バラの茎が折れた。と、同時にミカエルの眉がほんの少し寄り、指に小さく血が滲む。

「……好きですよ。ルシフェル様……も、ミカエル様も」

どちらも好き。その気持ちに偽りはない。それは、ミュウの本当の気持ちだった。
ミュウは血の滲むミカエルの指をとり、気を送った。滲んでいた血がゆっくりと消えていく。
その時、ミカエルが自分の手のひらをそっと包み込む腕を思いっきり引き、彼女をやさしく胸の中に包み込んだ。
「――！？　ミカエル様！」
先ほどのルシフェルの部屋でのことが思い出された。
胸の中にいるので、ミカエルの表情までは見えないけれど――。
彼の体を通して感じる鼓動は、それが、冗談やルシフェルに対する腹いせでないことを物語っているようだった。
「俺は、本気だよ――？」
そう言って腕の力を緩めたミカエルは、ミュウの両肩をしっかりと掴み、ミュウの唇に顔を寄せてきた。
びっくりしたミュウは思わず腕の中で力いっぱい抵抗する。
その刹那、寂しげな光がミカエルの目に宿った。
「……ごめん。――でも、相手がルシフェルだったら君はどうしただろうね？」
そっとミュウを解放し、寂しさを隠すかのように背を向けるミカエルに、ミュウは何とも答えられない。
抱きしめられた相手が、ルシフェル様だったら――？
「――小さいころからずっと君を見てきたんだよ。君が自覚してるかどうかは別にして、誰をどう思っているかなんて見てればわかるさ。……なのに、あいつは君の気持ちなんぞお構いなしに好き勝手を――」
ルシフェル様を思う気持ちと、ミカエル様を思う気持ちは、どこか違うのだろうか？
腕の中に抱かれたのがルシフェル様だったら、その腕を振り払っただろうか？

すでにミカエルの言葉はミュウの耳に入っておらず、ただ、その疑問だけが彼女の頭をめぐっていた。

これ以上ミュウと一緒にいると気持ちが抑えきれなくなりそうで、ミカエルはちいさく「じゃ」といって、ルシフェルの館を後にした。

自分の気持ちがわからないのは、言った本人も同じだった。

ミュウの前では、いつもの冷静さも沈着さもどこかへ吹っ飛んでしまう。

はじめてあったときは、まだ子供だったのに――。

自分の館へ向いながら、ミカエルの意識は、あの時――ミュウに始めて会ったときに引き戻されていく。

その答えは過去にみつかるか？（1）　ー出会いー

あの時――。
長老に呼び出しを受け行った本部の広間には、先にルシフェルが来ていた。
「君たちに任せたいものがおる」
そういって奥のほうから連れてこられたのは、小さな子供の天使。
見た目はまだ小さな子供だ。学校へ通い始めたくらいの……。天使の見た目は年齢には関係ないが、ある程度成長し、能力を身につけてくると、若い方向にであれば、本人が望む年齢の外見を取ることができる。つまり、子供のように見えるのは、本人がそう見せたいという場合と、本当に子供の場合のみだ。
「見てのとおりの……まだまだ子供だ」
ミカエルの疑問に答えるように、子供を連れてきた長老が口を開いた。
ルシフェルは何も言わずただ跪き頭を下げて話を聞いている。
「では、後は君たちに頼んだよ」
「えっ！？　あ……ちょっと――」
戸惑うミカエルと何も言わないルシフェルを残し、何の説明もしないまま、長老は子供を置いて広間を後にした。
長老の命令は、絶対だ。逆らうことは許されない。その上、間違ったことを好まない正義の天使であるミカエルにとって、上官である長老にはむかうなど、性格的にも許されることではない。
「……で、どうするつもりだ、ルシフェル？」
長老は、「君たち」と言っていた。つまり、ルシフェルとミカエルで決めるのが筋というものだ。前々から気に入らない相手ではあったが、長老にそういわれると、従わなければならない。
「――オレは、この後大事な用事がある」

いきなり子供の面倒を頼まれたというのに、動揺さえ見せず、いつもの冷静な口調でルシフェルが口を開いた。
『だから、早く決めて、とっとと帰らせろ』ということか。成程、だから先ほど長老にも何も言わなかった訳だ。
「ふん……どうせ、女だろ」
『ならどうした？』と言わんばかりの不敵な笑みでミカエルの問いに答えるルシフェル。ミカエルは、この神聖な場でも女のことしか考えていないルシフェルに苛立った。
「早く帰りてぇなら、そいつも連れて行けよ」
何も考えず、苛立ちに任せて言ったせりふだった。口にしたときは、まさかそんな展開になろうとは思ってもいなかった。
「そうか、わかった。――では、そういうことで。――おい、行くぞ」
ルシフェルは反論もせず、子供の手をとって広間を出て行った。
それから、ミュウはルシフェルの館でルシフェルとともに暮らすようになった。
長老に任せられている義務感もあり、ミカエルはミュウの様子を見に、それまで以上にルシフェルの館を訪れるようにもなったが、ルシフェルがミュウのことについて、何かをミカエルに相談することなどなかった。部隊に所属できるほどの能力を身につけたときでさえ、ルシフェルは何も言わずミュウを自分の部隊に入れたのだ。
学校を終えた天使は、必ずどこかの部隊に所属する。それぞれの部隊のトップに大天使がいて、その部隊の中で、能力を伸ばしたり、実地経験をつんだりして一人前の天使となっていくのだ。一度選択した部隊は、よほどの能力を発揮してほかの部隊に引き抜かれるようなことがない限り変更はできないため、部隊の選択は、天使の生涯の中でも大きなイベントである。
ミカエルは、そのときが来たらミュウは自分の部隊に入るものだと信じていたし、そうすることがミュウのためであると思っていた。自分の所なら、直接面倒をみることもできる。また、部隊自体が大

きいため、新入りを熱心に指導し面倒を見る天使はいくらでもいるし、そのためのシステムも整っているからだ。
反対に、ルシフェルは大天使たちを束ねる天使長である。それだけでも仕事はたくさんあるはずであり、さらに特殊な任務を負う部隊をも率いている。その部隊は、特殊部隊であるため構成員は成績優秀なトップクラスの精鋭たちが少人数所属しているのみ。学校を出たばかりの新人の能力を伸ばしてやれるほどのシステムも整ってはいないだろう。どう考えても、なんのとりえもない少女が入ってやっていけるような部隊ではない。
そんなことくらい、あの冷静で頭の切れるルシフェルには分かっていると思っていた。
ミュウのこれからを考えてやった時に、どちらに所属させるのがより彼女のためなのかということぐらい。

……。あのとき、自分が面倒を見るといっていたら、ルシフェルやミュウとの関係は今とは違っていただろうか？
「……ふ、ばかげている」
ミカエルは頭に浮かんだ仮定を口に出して否定してみた。いまさら言ったところで、どうしようもない。
自分はただ、ミュウに幸せになってもらいたいだけだ。
過去をいくら思い返してみても、もう、どうにもならないのだから。

その答えは過去にみつかるか？（2）　―ぬくもり―

『好きなんだろう？　ルシフェルが――』

ミカエルに投げかけられた言葉が、その日以来、ミュウの頭の中をぐるぐる巡り、離れなくなった。

何かあると、その疑問が頭の中を駆け巡り、これまでの経験を引っ張り出してきては、答えを求めようとし始める。

はじめて会ったあの日から、ミュウはルシフェルの館で一緒に暮らし始めた。最初のころルシフェルは、無口で感情も表さず、必要以上にミュウに近づくこともしなかった。小さな子供の世話などしたことがないから当然だろう。しかし、近づきがたい雰囲気を持っていたとはいえ、ほかに頼る者のいないミュウにとっては、ただそばにいてくれるだけでも嬉しかった。

あれは、いつだっただろう――？

ミュウがまだアカデミアに通いはじめて間もない頃――自分のことが自分でできるようになり、ルシフェルのことも館のことも分かり始めたころだ。人間の年齢で言うと、８歳くらいだろうか。

ミュウは何かの絵本で、王様のお城につれてこられそこで王様のために働かなくてはならない子供の話を読んだことがあった。

いきなり、美しくて強い王様――ではなく、ミュウの場合相手は天使だけれども、天使の中では最高位にあるという点においては間違っていないだろう――の館につれてこられ、そこに一緒に住むように言われたミュウは、その子供に自分の姿を重ねる。

自分は、ここに住まわせてもらっていて、何もしていない。はたして、それでいいのだろうか？

そして、ミュウは、決心する。

「――あたし、るしふぇる様のためにはたらくっ！」

その日からミュウは、見よう見まねで館の掃除や、庭の掃除をし

始めた。
「――ミュウ、何をしている――？」
ルシフェルがミュウの変化に気が付き声をかけたのは、ミュウがバラの咲き乱れる庭を掃除していた時だった。
いきなり背後から声を掛けられて、ミュウはびっくりして振り向こうとした。――とたん、足元に転がっていた箒を踏んでしまってバランスを崩す。バラの茂みの中に体が倒れかけ、ミュウは目をつぶった。
「きゃッ――」
――ザザッ――。
茂みを揺らす大きな音がして、ミュウはバラのとげの痛みを覚悟した。しかし、自分の左肩に覚悟していた痛みはなく、むしろ、硬いけれど温かい感触が左肩から背中に向かって広がっている。
「――ってぇ……」
その声に、ミュウは、バラの茂みと自分の間に、ルシフェルが倒れていることに気がついた。
「るるるるしふぇるさまぁっ！？」
ミュウは、ルシフェルがこんな風に身を呈して自分を助けてくれたことに、とても驚いた。
いつもクールな雰囲気を漂わせ、何が起こっても慌てず冷静で不敵に笑うルシフェルしか見たことのなかったミュウにとって、自分を守るなどという彼のそんな態度は理解できるはずがない。
だから、これは夢だと思った。いつもは少し離れたところで、ミュウを冷ややかに見ているルシフェルが、今はその体温を感じることができるほど、こんなに近くにいる。これまで他人の肌の暖かさなど感じたことのなかったミュウにとって、それは本当に夢のような状況だった。
夢なら、覚めないで、このままその温かいぬくもりに包み込まれたい――。
ミュウはそう思い、もう一度眼を閉じた。

「……」
一方、ミュウをかばい思わずバラの茂みに突っ込んでしまったルシフェルは、半ばあきれてものが言えなかった。
……いま、オレに、気がついた、よな？　……なのに、なんでこのまま目を閉じるんだ??
ミュウの行動は理解不能だったが、この自分にさえ理解できないものがあるのだということを理解したルシフェルの中で、何かの糸が切れたようだった。
……ふ……ふ……。――ははは――。
突然、可笑しくなった。この状況も、ミュウとバラの間にいきなり飛び出した自分自身の行動も、嬉しそうに目を閉じたミュウの反応も――。
気が付けば、ルシフェルはミュウを抱えたまま、バラの茂みの中で声を出して思いっきり笑っていた。
いつ以来だろう？　こんなに大声で笑うのは――？
しかし、笑いだしたら、何もかもがおかしく感じてしまい、もう止まらない。
「……るしふぇる、さま――？」
実際に耳元で聞こえてくるルシフェルの笑い声に、ミュウもようやくこれが夢ではないことに気がついた。なぜルシフェルがこんなに笑っているのかわからない。が、いつもと違うルシフェルのやわらかい雰囲気が、ミュウはとても嬉しかった。
「――気がついたなら、とりあえず、立ち上がってくれないか――？」
ミュウに素で笑っている自分を見せてしまったことが、少々気恥ずかしいところではあったが、相手はまだ子供である。ここでムキになるのも大人気ない。
ルシフェルは、再びつけかけた冷静沈着な仮面を投げ捨て、柔らかい笑顔でミュウの背中を支えゆっくりと立ち上がらせた。
「――るしふぇる様……ごめんなさい。あたし――」

ミュウは申し訳なく思い、ルシフェルにむかって手を差し伸べた。
こんな子供が、このオレを引っ張って立ち上がらせようだなんて――。
それも、ルシフェルには理解しがたいことで、やはり笑いが込み上げてくる。
それでも差し出された手を振り払うことなく、ルシフェルは素直にその手を握り、彼女に負担をかけないように起き上がった。
今にも泣きそうな、困った顔でじっと自分を見つめるミュウに、これまで誰に対しても持ったことのない温かい気持ちがルシフェルの胸の中に広がり、彼にほんの少しだけ恍惚感を与え始める。
こんなことくらいで泣きそうになるなんて――。オレが怒るとでも思っているのか？　一体、この少女にとって自分は、どのような存在なのだろう――？
ルシフェルの中に急にこの目の前の少女に対して興味が湧いてきた。いつも冷静で頭の良い彼なら、たいていのことはわかる。だが、目の前にいる少女は自分の理解の範疇を超えていて、自分の常識や経験が役に立たないことを思い知らされた。
それに、自分に理解できないものがあるなど、ルシフェルは自分のプライドにかけても許せないことでもある。
「ふふ……いいさ。続きはゆっくり部屋で聞こう。――来いよ。お茶にしよう」
思いがけないミュウとの急接近に、引き出されたルシフェルの素の部分。
今まで誰にも見せたことのないそんな自分に戸惑いながらも、ルシフェルは心の中に春風が吹いたように、暖かくさわやかな気持ち良さを感じていた。
「――それでね、あたし、ここにいる以上は、るしふぇる様のお役に立てるように、いろいろお手伝いしなきゃと思ったの」
ルシフェルの部屋で、猫足の椅子に腰掛け、伸ばしたつま先を床につけて座って、ミュウはこれまでの経緯を一生懸命説明した。

目の前にいるのは、いつもの冷たい瞳のルシフェルではない。自分を見つめるその瞳に、ミュウは暖かさと安心を感じ、ついついいつもより饒舌になる。
「……なるほど。――だがな、ミュウ。それは、ちょっとまちがっている」
「――？」
「……オレが王様なら、ミュウはここではお姫様だ。――お前は、ここでは好きなようにすればいい」
「――るしふぇる様が王様であたしがお姫様ってことは……るしふぇる様はあたしのお父さんってこと？　そんなの、いやよ。だって、お父さんとは「けっこん」できないし――だったら、るしふぇる様は王子様がいいわ！」
――ぶっ！
まじめな顔でそう答えるミュウに、ルシフェルは思わず飲みかけた紅茶を噴出しそうになった。
――まさか……オレを誘ってる――ワケねぇよな……この年齢で――。
「くくっ。――お前、おもしれぇ――」
このときのミュウにとって「けっこん」とは、末長く一緒に暮らすことくらいの認識しかなかった。これまでルシフェルとともに過ごして来て、彼以外のほかの誰かと一緒に暮らすなど、ミュウには考えられないことであったからだ。
ルシフェルはもうミュウに笑顔を隠すことはなくなっていた。――いや、隠す必要を感じなかったのかもしれない。
「……じゃ、るしふぇる様は、王子様に決まりね」
ルシフェルが否定しなかったので、ミュウはそれを肯定の意味に採った。
「――いいよ。……オレが、お前を全力で守ってやろう、お姫様――」
くすり――と優しく笑うルシフェルの表情が、ミュウの心に焼き

ついた瞬間だった。
この日以来。ルシフェルはミュウにだけは素の自分をさらけ出せるようになっていった。他者に対してはいつも上に立つものとして向き合わなくてはと気負っていたが、彼女に対してはそうしなくて良いのが楽だった。
この少女には「天使長」の顔も「光の天使」の顔も、必要ない――そのことが、彼の心に暖かい光を投げかけてくれていると、ルシフェルは少しずつ気がつき始めていた。

その答えは過去にみつかるか？（3）　ーとまどいー

そして、時が流れ、アカデミアの修了が近づいた頃だった。皆がそれぞれにこれから所属する部隊を決め始める。

「――ミュウは……これからのこと、どう考えてる？」

仕事の合間にミュウを呼び出したルシフェルは、机の上に書類を置きながら、部屋に入ってきたミュウに問いかけた。

これからのこと……つまり、ルシフェルはミュウの部隊の選択について聞いてきているようだ。アカデミアで学ぶ期間が終了に近づいてきていて、ミュウはそのあとについて考えていないわけではなかった。――が、それを口にしてもよいのか、迷った。

「――私は……」

――できれば、ルシフェル様のお側に――。

ルシフェル以外の部隊に所属するということは、ミュウがこの館から出るということを意味する。しかし、経験どころか能力さえ抜きん出ているというわけではないミュウにとって、精鋭部隊として名高いルシフェルの部隊での仕事が務まるはずもない。

もっと自他ともに認めてもらえる能力があれば、こんなに迷わなくてよかったのに……。

ミュウは、どう答えていいかわからなくなり、困った顔で床に視線を落とした。

「――こっちに、来いよ」

くすっ――と笑ってルシフェルは優しいまなざしでミュウに椅子に座るよう促した。

ミュウの困った顔を見るたびに、バラの庭で初めてこの少女に触れたあの日の気持ちが甦る。そして、彼の胸の蓋をわずかに開き、あの時と同じ温かい気持ちをあふれさせるのだ。ただあの日と違うのは、ミュウは今ではもう無理してつま先を伸ばさなくても、普通に腰かければ床に足が届くほど成長しているということだけ。

ミュウが椅子に腰を下ろすのを確認しルシフェルは温かいお茶をカップに注ぎ始めた。
「――飲むか？」
そして、ミュウの前に片膝をつき、依然うつむいているミュウを下からのぞきこむように見上げて、そっとカップをミュウの両手に持たせた。
「――！」
ミュウは、そっと触れられた手にどきっとした。温かいカップを持っていたせいか、それとも、もともとそうなのか、自分の手を包み込んだルシフェルの手が、大きくてとても温かかったから。そして、大きくて温かく、力強ささえ感じるその手に、「男」を感じたから。
ミュウも、アカデミアでは仲のいい友達と異性の話で盛り上がるいい年頃だ。奥手なミュウは彼女たちの話を聞くだけの立場であったが、聞きながら、頭の中でその話を自分に置き換えてみたりもする。そして、その時に思い浮かんでくる男性は、いつもルシフェルだった。それが、「愛情」によるものかどうか、彼女自身にもよくわからなかった。ただ、彼女にとってルシフェルが一番身近な存在であり、そういう意味で自分の相手として一番想像しやすいというだけなのだろうと、本人は思っていた。
――この大きな手で、肩を抱き寄せられたら……。
と、アカデミアでの仲間との猥談の影響か、当の本人を目の前にして不意に浮かんだ。しかし、そのいやらしい考えが、これまで自分を育ててくれたルシフェルを裏切るように感じて、ミュウは慌ててその淫らな欲望をかき消そうとした。
一方ルシフェルは、そっと包んだ手がビクンと動き、頬を恥ずかしげに染めて目を合わせられない様子のミュウに、彼女が自分を異性として見ていることを理解する。
そして、同時に湧き上る奇妙な感覚。それは、彼女の「女」の部分に他の男を入り込ませる余地を与えたくないというただの独占欲

なのか、それとも、子どもだと思っていたミュウが自分の知らない間に「女」になりつつあるという苛立たしさか。
そのどれかはわからなかったが、自分にこのような奇妙で複雑な感情を起こさせるミュウが小憎らしく、ルシフェルはミュウを苛めたい衝動に駆られた。
「――ミュウ……」
ルシフェルは彼女の目を見つめ、吐息交じりに熱い気持ちをこめて名前を呼んだ。
不意に名を呼ばれて視線を向けた先には、目の前に片膝をついて座り、上目遣いのせいか少し潤んだ瞳で見つめているルシフェル。ミュウにとって、それは、まさに姫に誓いを捧げる王子だった。そして、必死で抑えようとしていた彼女の中の「女」が完全に目を覚まし、彼女自身それを抑えきれなくなっていく。
「……ルシフェル様――」
見つめ返すミュウの瞳も熱く潤み始める。吐く息に熱がこもり始め、ルシフェルを求め、今にも全身を投げ出しそうな――。ルシフェルはそこにまぎれもなく「女」を確認した。
素の自分をさらけ出せる「女」に、身も心も激しくぶつけられたらどんなに気持ちがいいだろう――。
ルシフェルの中で更に高い恍惚感を求める獣が臨戦態勢に入り始めた。
しかし、ミュウが本当に自分を「男」として求めているのか、ルシフェルにも判断がつかない。彼女に幸せを与えるのは、――認めたくないことではあるが――自分以外にもいないとは断定できないし、まだ「女」として目を覚ましたばかりの彼女に欲望があったとしても、それが誰か一人に対してのものなのか、それとも、「行為」自体に興味があるのかさえわからない状況では、彼女を庇護する者としても、ここで欲望に任せてミュウを抱いてしまうわけにいかなかった。
仕掛けたのは自分なのに、自分を信頼しきっている吸い込まれそ

うなほど澄んだ無垢な瞳に、危うく自分自身が落とされそうになってルシフェルは、何とかミュウから目を逸らし、自分を抑えた。
「……お茶が、冷めるぜ」
目元を緩め、何とかそう絞り出したルシフェル。しかし、あと少し見つめあう時間が長ければ、どうなっていたか、本人でさえ分からなかった。もちろん、それをミュウに悟られるわけにもいかない。ルシフェルは今にもあふれだしそうな思いを意思の力で抑え、口の端にからかうような笑みを纏った。
ルシフェルのその表情にミュウは、自分だけがイケナイ妄想をしてしまったと感じ、みるみる頬を染めて自己嫌悪に陥る。
ルシフェルは、ミュウの今まで見せたことのないその恥ずかしげな、はにかむような表情に、また、胸の中からとめどなく溢れる思いを抑えなくてはならなかった。
その反応が反対にルシフェルの心をそそる結果になっていると、彼女はわかっていない。
ルシフェルが彼女をからかうようになったのはそのときからだった。ミュウの「女」に対するささやかな抵抗として――。
「――あ、はい」
まるで命令されたかのように、急いでカップに口をつけるミュウ。すでに思考能力は半分以上奪われていた。
「――ところで、ミュウは、アカデミアを出た後、どうしたい？」
そこへ、最初の質問が再度投げかけられる。
何を答えていいのか、どう答えていいのか、そもそも答えていいのか、その判断すらできなかったミュウは、思っていたことをそのまま口にした。
「――できれば、ルシフェル様のお側に――」
さすがにルシフェルを直視して言うのは恥ずかしかったのか、カップに目を落としたまま、頬を染めながら小さく――ではあったが。
「――そうか。……わかった」
ルシフェルが、「よくできました」というように、にこりと微笑

んでくれたおかげで、ミュウはすこし心が救われた。

翌日アカデミアで学園長室へ呼び出されたミュウは、そこに制服姿のルシフェルの姿を見つけた。

この時期、他の大天使が卒業生のスカウトなどでアカデミアに来ることはあっても、新人をスカウトする必要のないルシフェルがここに来ることは珍しい。しかし、制服で――ということは、なにか正式な用事があって学園長に会いに来たのだろう。

部屋に入ってきたミュウに、ルシフェルは一瞬ニヤリと不敵な笑みを見せたような気がした。

「――実は――」と、学園長は、動転を隠せないようすで話し始めた。

「ルシフェル様は、君を、ご自分の部隊にスカウトされたいと――」

ルシフェルが学園に姿を現すこと自体珍しいので、生徒たちにはすぐにルシフェルの来園が知れ渡った。そしてこの時期だからこそ、スカウトの噂が飛び交い始める。その後ミュウが学園長室に呼ばれたことで、彼女がルシフェルの部隊に入るという話に変化して、彼女がその部屋を出るころにはすでにルシフェルがミュウをスカウトしたという話は学園中に広まっていた。

「――っつーか。アカデミア出たてで、ルシフェル様の部隊に入れるって、おかしくねぇ？」

「……だよなー。あそこに所属してる人たちって、めちゃエリートっつー話しだもんな」

「――なんでも、普通は他の部隊から引き抜かれねぇと入れねぇとか……」

「ホントッ！？　……なら、よっぽどだねぇ」

「――えーっ、あの子、そんなにデキる子だったっけ？」

「あの子が入れるなら、私もルシフェル様の部隊に入りたいわ――」

ミュウが学園長室から教室に戻るその間にも、聞こえるように嫌味が飛び交う。

――やはり、ルシフェル様の部隊に入れてほしいというのは、わがままだったかもしれない――。
と、ミュウはいたたまれない気持ちになり、ルシフェルに本音を漏らしたことを少し後悔し始めていた。周りから浴びせられる嫉妬を含んだ冷たい視線に、目も上げられなくなり、ミュウは足元を見つめて立ち止まる。
「もっと凄い人かと思ったけど……ルシフェル様の判断力もたいしたことねぇな――」
思わずルシフェルに本音を漏らしてしまった自分はともかく、彼を悪く言われるのには腹が立った。
できることなら、彼らに言い返したい。……でも、一体なんて言い返せば――？
そのとき、自然に大きくなりつつあった非難の声が、不意に止んだ。それと同時に、うなだれて小さくなっているミュウの右肩に、ふわりと大きくて温かくしっかりとした手が載せられて、彼女を引き寄せる。
「――てめぇら！　聞こえよがしに言ってんじゃねぇよ！　オレが決めたことに文句があるなら、直接オレに言いに来い」
低くて冷たい声が、廊下に響き渡った。ルシフェルがミュウの肩に回した手に力が入りさらにミュウを近くに引き寄せる。ミュウの左頬がルシフェルの厚い胸に触れた。
「……つっても、オレにはこいつが必要なんで、スカウトを撤回するつもりなどないがな――」
いつもの不敵な笑みを浮かべる天使長のルシフェルに、生徒たちがこれ以上何を言えようか。
この一件があって以来、ミュウの部隊選択は、表向きは「ルシフェルが決めたこと」ということになった。ルシフェルは、ミュウを非難の声から守ってくれるつもりだったのだろう。……とはいえ、この発言がルシフェルとミュウの関係についての噂の種となったのだが。

「ねぇ、ルシフェル様とミュウって、一体どういう関係なのよ？」
「ルシフェル様は、ふだんはどんな感じなの？」
仲のいい友達は、ルシフェルとミュウのことを聞きたがった。天使長とさえない天使の恋愛なんて、彼女らにしてみれば格好の話のネタだ。彼女たちとの会話にはこれまで以上にルシフェルの名前が出てくるようになり、それに合わせるかのように、これまでミュウが心の中で必死に凍らせて隠していたものが日の光を浴び溶けて急に活動を始める。次第にミュウはルシフェルの名前を聞くたびに、ルシフェルの存在を感じるたびに、彼を意識せずにはいられなくなっていった。
ルシフェルの優しい声を聞くたびに、甘くささやかれる自分の名前を――。
ルシフェルの力強い腕を見るたびに、それで守られる自分を――。
ルシフェルの逞しい胸を見るたびに、それに抱かれる自分を――。
ルシフェルの繊細な指を見るたびに、それで弄ばれる自分を想像した。
ミュウのみだらな妄想は、だんだん加速していく。いけないことだとは思いつつも、ルシフェルのどの部分にも、欲情してしまう自分がいる。いや、いけないことだからこそ、欲望は勢いを増してくるようだった。
ルシフェルがそれまで以上に、来る女を拒まず抱くようになったのも、この頃からだった。そして、そんなルシフェルの行動に、ルシフェルとミュウの二人の関係に対する友達たちの興味も薄れていく。
しかし、噂が収まり「ほっ」とするのとは逆に、ミュウは、ルシフェルが自分ではない女を寝室で喘がせていると知るたびに、胸が締め付けられるようになっていった。想像の中ではルシフェルはミュウを悦ばせるためにいろいろとしてくれてはいたが、実際のルシフェルの相手が自分ではないことが、とても辛い。
ただ、どんなに美しい女を抱いても、どんなに権力のある女を抱

いても、彼女らを見送った後のルシフェルが何か物足りない表情でいたのは、不謹慎かもしれないが、ミュウの心の救いでもあった。
ルシフェルは全ての相手を満足させたが、ただ一人、自分に対してだけは満足を与えられないようだった。彼のそのときの表情は、見ているミュウにとっても胸が苦しいものだったが、それは言い換えれば、ルシフェルが心も体も満足させられる女にまだめぐり合えていないということ。ただそれだけが、ミュウの心の拠りどころでもあり、一縷の望みでもあった。

その答えは過去にみつかるか？（４）　―変化―

部隊に入ってしばらくたった頃だった。
「ルシフェル様――、失礼します」
急用だったのでノックの返事も聞かずに、急いで執務室のドアを開けたミュウは、見てはならない光景に思わず開けたばかりのドアを急いで閉めた。長身の男ときらびやかな女がドアのすぐ間近で、抱き合い口づけをしていたからだ。
ルシフェル様と――女神さま――？
もともと住む世界が違うため、ミュウは女神を見たのは初めてだった。しかし、華やかでゴージャスないでたちや雰囲気は、天使にはないものだったので、すぐに分かる。この世で一番美しい天使とされるルシフェルの噂は、一体どこまで知れ渡っているのだろう。
ガチャリとドアが開いて、中から二人が姿を現した。
「――じゃ、ね。……良かったわ、ルシフェル――」
艶めかしく甘い余韻を込めてねっとりとした視線をルシフェルに残し、その女は、まるでミュウの存在などそこにないかのように、立ち去って行った。
その背中を、去って行った女とは対照的に、苛立ったような、冷たい目で見つめるルシフェル。その口元には自嘲するような笑みさえ浮かんでいるように見えた。そうすることで彼の心が崩れないようにバランスをとろうとしているような、危うささえ感じるのは、気のせいか。
「……ルシフェル様――ごめんなさい」
返事も聞かずドアを開けたことに対して、ミュウは謝罪した。心を閉ざし凍ったような彼の雰囲気は、先ほど自分が不用意にドアを開けてしまったせいだと思ったからだ。
「――ああ、ミュウか。……どうした？」
ルシフェルは、たった今そこにいるミュウに気がついたようだっ

た。ふと、目元が柔らかくなる。
そう聞かれて、ミュウはここへ来た用事を改めて思い出した。
「緊急指令です。カレンス渓谷のあたりに、魔物が現れたとのことで――」
仕事のこととなると、ルシフェルはまた別人のように見える。威厳に満ちていて、頼りがいのあるリーダーの顔。
「わかった。――オレはすぐに出る。お前は、Aチームを連れて、後から来い」
それは、ミュウにとって初めての任務といってもよかった。
普通の任務なら、ルシフェル自らが出ていくなどということはめったにない。ただここから指示を与えるだけだ。しかし、緊急ともなると、事態は大きく変わってくる。『ルシフェル』の部隊に直接命令が下るということは――それなりに相手が手ごわいということを意味しているからだ。ルシフェルはすぐにそれを理解し、現地へと向かった。
ルシフェルの背中を見送ったミュウも、もたもたしていられなかった。
カレンス渓谷は、天使界でも辺鄙なところにある、普段はめったに誰も来ないようなところだ。草木が生い茂り、木の生えていないところには、美しい花もたくさん咲いている。こんなときでなく、距離を考えなければ、ピクニックに持ってこいの場所だろう。しかし、今はその景色をゆっくり楽しんでいる場合ではない。
ミュウが部隊のAチームとともにその場へ着いた時、そこにはすでに、たくさんの天使たちが集まってきていた。
とんがった山の上の空中では、武装した天使たちが見るからに異形の者たちと剣を交えているし、花が咲き乱れていたであろう草原には、負傷した天使たちが横たわっており、その間を、手当てする天使がせわしなく動き回っている。
ミュウは中空で戦っているたくさんの天使たちの中に、ルシフェルの姿を見つけた。明らかに他の天使とは違う、しなやかで無駄の

ない洗練された動きとそれに合わせて長めの黒髪がなびく、その華麗な姿は遠くからでもすぐにわかる。
思わずミュウが見とれていると、ルシフェルも彼女に気がついたのか、戦線を一旦離脱し彼女のほうへ向かってきた。
「――すぐ、準備して、加勢しろ」
ミュウの後ろにいたAチームにそう伝え、彼らがそちらへ向かっていくのを見届けると、ルシフェルは改めてミュウに目を向けた。
乱れた前髪と少し上がった息が艶めかしく、彼の危険な魅力をさらに引き立てている。こんな状況であるにも関わらず、ミュウは胸をときめかせる。
「ミュウ、お前は、負傷者のほう――ラファエルを手伝え」
ルシフェルはそう言って、戦線に戻りかけたが、思い出したように振り返って、にやと嗤って付け加えた。
「……危なくなったら、逃げろよ――」
「――はぁ……いつ見ても、相変わらずいい男ねぇ――。ほれぼれしちゃう……」
ミュウの隣で、すらりとした長身の天使が、頬に両手を当てモスグリーンの瞳でうっとりとルシフェルのうしろ姿を見送っていた。
「……ラファエル様――」
「あら、アタシったら、つい見とれちゃったわ。……なにボケっと突っ立ってんのよ、けが人がたくさんいるのよ。――手伝いに来たんなら、動きなさい」
ミュウがあっけにとられてラファエルを見つめていると、ルシフェルに見とれてしまった自分の醜態を隠すように、彼はあいかわらずのおネェ言葉でミュウに檄を飛ばした。
足元に苦しげに横たわっている傷ついた天使を癒すため手を当て始めると、ラファエルも隣に座り込んで、別の天使の手当てを始める。
「――最近、ルシフェル、変ったわね……」
ミュウに目を向けることなく、ラファエルがそう呟いた。独り言

なのか、それともミュウに話しかけているのか、判断がつきかねたが、何しろ相手は大天使だ、無視したと思われても困るのでとりあえずミュウは返事をする。
「――そう、なんですか？」
確かに、ここのところ女性関係が派手にはなってきたが、ミュウは特別ルシフェルが変わったとは思わなかった。
「そうよ。……貴女、側にいるのに気がつかないの？　――いや、側にいるから気がつかないのかもしれないわね」
ラファエルは横目でミュウを見て、ふふっと笑った。
「どんな風に、変わったと思われるんですか？」
「そうね――。昔は、もっと冷たくて尖がってて――近寄る者全てを傷つけるような鋭さがあったわね。怖いものなど何もないって感じで、どこにでも飛び込んでいくし――張り詰めた細い糸の上を渡っているような危うさがあった。――ま、それも彼の魅力といえば、そうなんだけどね。昔からファンはたくさんいたけど、だれも近づけなくて、みんな遠くから見つめるくらいしかできなかったのよ」
ラファエルは遠い目をして、昔を思い返しながら語った。
「――けど、最近のルシフェルは、どこか違う――。雰囲気が柔らかくなったっていうか――近寄っていっても、受け入れてもらえそうな、包容力が感じられるというか……口が悪いのは相変わらずだけどね。だから、ファンの子は彼に対して夢も見られるし、実際声をかけるようになったんじゃないかしら。もちろん、だからこそあの頃に比べれば彼を恋い慕う女の子も増えたんでしょうけど――」
今のルシフェルには、女の子に『ひょっとしたら自分も……』と夢を見させてくれるところが、確かにある――と、ミュウは思った。ルシフェルが、ラファエルの言うとおり、いつも冷たい目で相手のことなど気にもかけていないような人物なら、ミュウは彼相手にみだらな妄想などできないだろう。
張り詰めた糸の上を渡っているような――危うさ。
ミュウは思わず宙を見上げてルシフェルを目で追った。どこにい

ても、どんなに遠くても、ミュウにはすぐにわかる。しかし、ミュウにはどうやっても見る事のできない昔の、ルシフェル。
だが、彼女には、ルシフェルのその危うさに心当たりがあるような気がした。
徐々に天使軍の数が増えてきた。ふいをつかれたとはいえ、もともと天使のテリトリーだ、時間さえ稼げば、援軍も次々に到着する。しかし、魔物たちは最後まで抵抗を試みるつもりなのか、先ほどよりも激しく応戦しているように見える。
心配そうに見上げるミュウに気がついたラファエルが、話題を変えた。
「――それにしても、最近、魔物が多くなったわね――。次元の歪みがだんだん大きくなっているのか、ここへくる魔物も大きくなってきて……おかげで、アタシの部隊は毎回狩り出されて大変よ」
ラファエルは癒しを担当している大天使だ。実際に戦闘に加わるわけではないが、魔物との戦闘で傷ついた者を、毎回こうして救護するのだろう。
「魔物が、どうして――？」
「ま、簡単に言うと、――天使界と魔界の間にある人間界のバランスが崩れかけているから、魔物がこちらに入り込みやすくなっているみたいね。魔界は魔界で秩序がなくて、どうにか自分の力を示して天辺を取ってやろうという輩が多いのよ。――で、頭の悪い彼らが時々思いつくのが、天使界への侵略ということみたい――」
そのとき少し離れたところで、ラファエルの部下が彼を呼んだ。
「じゃ、アタシ行くわね。ここは頼んだわ」
「ミュウ！　危ねぇっ――！」
――ドゴァッ！
ラファエルがその場を離れると同時に、背後で大きな声が聞こえた。その声に思わず身をすくめると、すぐ背後で大きなエネルギーがぶつかり合う音がした。
振り向くと、先ほどまでラファエルがいた――今は、ミュウがい

るあたりで、大きな衝撃に草花のみならず、土も舞いがっている。
ラファエルは思わず駆け寄った。
そして、その中心に、ルシフェルが倒れていたのを認める。羽にまともに相手の攻撃を食らっているが、何とか意識はあるようだ。
「――貴方らしくないわね、ルシフェル」
目の前にいる男が、「ほんとに『あの』ルシフェルか？」と疑いながら、あきれたようにラファエルが言った。しかし、声をかけられたにもかかわらずラファエルには返事さえせず、何とか頭を持ち上げて辺りを探ろうとしている。
「……ミュウは、無事か？」
名前を呼ばれて、ミュウはおずおずとルシフェルに近寄り、横たわる彼の右横に座った。
「――ルシフェル様……ありがとうございます――」
ミュウは、ルシフェルが自分の身代わりになったのだと、申し訳ない気持ちでいっぱいで、今にも泣き出しそうだった。
あの時、ルシフェルが声をかけてくれたのに、ミュウは驚いて足が動かなかった。
それを見定めたルシフェルが、相手の攻撃とミュウの間に割り入ったのだが、とっさのことだったので、余裕でそれを受け止めるには間に合わず、代わりに必死で大きな羽を広げ盾としたのだった。
「――危なく、なったら、逃げろと……言っただろうが――ってぇ」
声を出すのも辛そうだ。かなりの衝撃を受けたのだから、傷は羽だけではないのかもしれない。
「……く、ざまぁねぇな……けど、お前が、無事で……よかった――」
ルシフェルは、ミュウの左頬に右手をあて、その温もりを確かめてから、安心したように目を閉じた。
「ルシフェル様っ！」
「命に別状はなさそうだから大丈夫よ。気を失ってるだけだわ。――彼の精神力と体力を持ってすれば、安静にしていればすぐ回復す

るわよ」
ラファエルは、ありえないといった表情でルシフェルを見つめたまま言った。
――まさか、あれだけ離れたところで自分も戦いながら、アタシ達の動静を気にしてたっていうの――？
先ほどの一撃は、魔物たちの苦し紛れの最後の抵抗だった。全ての気を合わせて放出した彼らは、ほとんど力を使い果たしたようで、空中での戦闘は収束へと向い始めていた。

その答えは過去にみつかるか？（5）　―答え―

どの思い出を引っ張り出してきても、そこにはさりげなくミュウを守るルシフェルがいた。バラの茂みからミュウを守ってくれた、あの時から、確かにルシフェルはミュウにとっての王子様であったのだ。ミュウは、自分を守ってくれる男性はルシフェル以外に考えられなかったし、いつか自分が彼を満足させられる存在になれたら……とも思っていた。

『好きなんだろう？　ルシフェルのことが――』

ミカエルがミュウに問いかけた質問が再びミュウの頭をめぐる。

――私は、ルシフェル様が……好き。――ルシフェル様を、満足させられるただ一人の人になりたいと思う、けど――。

しかし、それを自覚したところで、ルシフェルの部下である自分に何ができるというわけでもない。むしろ、その気持ちに気がついたことで、そのやり場のない思いを抱えてこれからどうすればいいのか、また新しい疑問がミュウの頭の中を占めることになっただけだった。

一人で考えていても答えは出なかった。

ここでミュウがルシフェルに自分の気持ちをぶつけても、「部下である」ということ、それ以前に「庇護される立場」という事実が目の前に大きく立ちはだかるように感じた。

いずれにしても、ルシフェルが自分を「女」として受け入れてくれるには、難しい状況である。そこへ、ミュウがこの気持ちを解放してしまえば、これまでの関係も壊れてしまうかもしれない。それなら、言わずに隠し通したほうがいい。ただ、勘の鋭いルシフェルにそれを隠し通せる自信がミュウにはなかった。しかし、ルシフェルにばれてしまうと、もう今までの関係ではいられないだろう――。

隠しておかなければならない、でも、隠し通せない――ではどう

すれば――？
ミュウの思考は同じところをぐるぐると辿り、結局同じ所へ戻ってくる。
いつもなら何かを相談する相手はルシフェルだったが、こんなこと面と向ってルシフェルには相談できない。ふだんは言葉さえあまり交わさない同僚にも、話せるはずがない。仲がよかった友達も、今はばらばらに部隊に配属されていて、ゆっくり相談する時間さえ取れないだろう。状況を理解し、親身に相談に乗ってくれる相手としてミュウに思い浮かぶのは一人しかいなかった。
――ミカエル様なら、何かいい考えをくれるかもしれない。
ミュウは、次にミカエルがやってくる日を心待ちにした。が、いつもは気がつけば現れるミカエルも、待っているときほど、なかなか姿を現さない。
そして、ルシフェルが、ここ数日そわそわして落ち着かないミュウの素振りに、気がつかないはずがなかった。
「なにか、気になることでもあるのか？」
窓の外を気にしながらボーっと気もそぞろで廊下を歩いているところにいきなり優しい声をかけられて、ミュウは心臓をつかまれたようにどきどきした。
「いえ……」
ミュウは後の言葉を言おうか言うまいか迷ったが、ルシフェルに聞けばミカエルの予定もわかるかもしれない……と淡い期待をこめて付け足した。
「――あの……ミカエル様は、次は、いついらっしゃるのでしょう？」
そのとき、ルシフェルの瞳の奥で鋭い光が走ったことに、ミュウは気がつかない。
「ミカエルに、なにか、用か――？」
もちろん、ルシフェルの声に鋭い敵対心が含まれていたことにも――。

型破りなリーダータイプのルシフェルと生徒会長タイプのミカエルという性質の違いはあれ、基本的にプライドが高く自信家の二人だ。ミュウのことを二人に任されて以来ミカエルがルシフェルのところへはよく来るようになったとはいえ、お互いに意識しあう部分も多く、親友というよりは悪友とか好敵手と呼ぶほうがふさわしい相手。

その相手を、ミュウが心待ちにしているというのは、ルシフェルとしても面白くなかった。

そういえば、ミュウがそわそわし始めたのも、ミカエルがミュウを連れて執務室を出て行ったあの日あたりからだ。――あのとき、ミカエルと何かあったのか？

気にはなったが、いつもミュウを気にかけていることなど本人に知られたくないルシフェルは、プライドも邪魔して自分からそう聞く訳にいかない。

一方、ミュウは「ルシフェルのことで相談をしたい」などと、当の相手にそんなこと口が割けても言える筈がなかった。

「……いえ……。――最近いらっしゃらないようですから……」

ミュウは言葉を濁した。ミカエルにルシフェルに対する自分の気持ちを相談するということを考えると、なんだか気恥ずかしくなって、彼女の頬に赤みが差す。

しかし、ルシフェルはそのミュウの一瞬の変化を見逃さなかった。

「――！　……なら、いい――」

激しい瞳でミュウを見据え、一瞬何かを言いかけたルシフェルは、次の瞬間、冷たい無表情になってふいと体を外らせて行ってしまった。

部屋のドアを大きな音を立てて閉め、一番近くにあった椅子を蹴っ飛ばす。椅子は柔らかい絨毯の上に鈍い音をたてて転がった。

思いがけずミュウの口から出てきた名前に、ルシフェルは怒りさえ覚えた。

――なにがミカエルだっ！　なぜそこで顔を赤らめるっ！！
あの場で思わず、我を忘れてそう大声を出しそうになった。だが、ルシフェルを押しとどめたのは、「自分にそう叫ぶ権利があるのか？」と問いかける理性の部分だった。
部屋に戻ってすこし冷静になってみると、どうしてそこまで自分が腹を立てたのか、自分でもわからない。
ミュウもいい年頃だ。誰かを好きになってもおかしくない。たとえそれが、ミカエルであっても。いやそこらへんの普通の天使よりミカエルのがまだ幾分ましかもしれない――。
しかし、だからといって、ミュウを黙ってミカエルにくれてやるのも癪な話だ。いつまでもミュウをここへ閉じ込めておくことなんて、できないとはわかっていても。
ルシフェルは、割り切れない気持ちにケリをつけたくて、一人がけのソファの背を思いっきり蹴っ飛ばした。蹴り上げたソファがセンターテーブルに向って鈍い音を立てて倒れこむ。
「――荒れてんな」
激高しているルシフェルの背に向って、今一番耳にしたくなかった声が響いた。
ドアが開いた気配はなかった。とすれば、この声の主はずっと部屋の中にいて、ルシフェルが部屋に戻ってきてからの一部始終を黙って見ていたということだ。
「……いたのか」
ルシフェルは、ミカエルに背を向けたまま答えた。自分が取り乱しているところを一番見られたくない相手でもあった。
「気がつかないなんて、お前らしくない――もっとも、そんなに感情的に怒りを顕わにしているお前も『らしく』ないがな」
嗤いを含んだその言葉に、いちいち腹が立つ。
「オレはいま、虫の居所が、とても悪い。――特に、おまえのその顔は、一番、見たくない。――今日は、帰れ」
今にも爆発しそうな感情を何とか抑えようと低い声で一言ずつ搾

り出すルシフェル。
「――ミュウと、なにかあったか――？」
ミカエルは、ルシフェルとはもう長い付き合いだからわかる。いつも冷静なルシフェルがこんなに心を乱す理由はミュウ以外に考えられなかった。
「きっ――さま……ミュウに何をしたっ！？」
ミカエルの言葉はルシフェルの耳に挑発として届いた。抑えていた感情の箍が外れて、ルシフェルはミカエルの胸倉を掴みあげる。
なぜルシフェルがこれほど荒れているのか、ミカエルにはわからなかったが、話の流れから、その理由は自分とミュウにあるようだと判断した。とすれば、先日ミュウに投げかけた「ルシフェルが好きか？」という質問以外に心当たりがない。
「……さぁな。――ようやく自分の気持ちに、気がついたんじゃねぇの？」
ミカエルはルシフェルの手を軽く捌いて襟元を直しながら軽く言った。
ルシフェルの脳裏に、先ほどの、ミカエルのことを口にしながら頬を染めたミュウが浮かぶ。
あんな顔をして――ミカエルを想ってるってか――？　少し前までは、オレにからかわれて頬を染めていたミュウが、あんな表情を見せるほどミカエルを――？
ルシフェルの中でこれまでもやもやして彼を悩ませ苦しませていたものが、とうとう「独占欲」という形をとって現れ始めた。
ミカエルであろうと他の男であろうと――オレ以外の誰にも、ミュウの「女」の顔は見せたくねぇっ！！　……けど……ミュウの気持ちを無視するわけにもいかねぇ。――くそっ！
その苛立ちを、目の前にいるミカエルにぶつける。
「……ミュウに、何をした――と聞いているんだ！」
ルシフェルは、俺とミュウの仲を疑っているのか？
ミカエルにはルシフェルの憤りの原因がつかめない。先日の様子

では、ミュウはルシフェルに気があるようだった。だから、ミカエルは自分の気持ちを押し殺し、ミュウの幸せのために自分にできるだけのことをしようと密かに決意し、自分に誓ったのだ。
しかし、ルシフェルの話を聞いている限りでは、ミュウは俺に気があるように聞こえるが――。
「――そんなに熱くなるなよ」
とにかく何があったのか聞いてみないとわからない。
ミカエルはルシフェルを何とか宥めようとしたが、その賺したような態度がルシフェルの怒りにさらに油を注ぐ。
「答えろっ！　何をしたかと聞いてるんだ。……返答次第では……オレはお前を殴るっ――」
といいながら、ミカエルに殴りかかる始末。
――しょうがない。ここは、気が済むまでつきやってやるか――。
ミカエルは内心ため息をついて、ルシフェルに応戦した。

どれほど殴りあっただろう、もともと力も互角の二人だ。勝敗など決まるものではない。
いつの間にか、二人は殴りあいながらも、本音をぶつけ始めた。
「ミュウに、手をだしたのか？」
ルシフェルはミカエルに馬乗りになり、胸元をつかみ上げて激しく怒りをぶつけた。
経験のないミュウなら、甘く囁き優しいキスを浴びせてやれば、落ちないと言い切れない。
「――手なんか、だすかよ！」
下からルシフェルを蹴り上げながら、「人の女に」と言いかけて、ミカエルは抑えた。いちいちこいつにそれを教えてやるのも、癪だ。
「なら、どうして、ミュウは――」
後ろ向きに吹っ飛ばされたルシフェルが再びミカエルに殴りかかる。
「てめぇがぼんくらだからだろうがっ」

ひらりとルシフェルの拳を避けて、代わりに彼の腹部に一撃を見舞うミカエル。
「なにっ！？　もういっぺんいってみやがれっ！」
ルシフェルはミカエルの口に指を入れてその口を横に伸ばした。
「えめぇあ、おんくあああからあろうあっ！」
「……」
口を引っ張られながらも律儀に同じセリフを吐こうとする間の抜けたミカエルに、ルシフェルは一気に戦意を喪失し、その場に座り込んだ。
「――くそっ……なんで、よりによってお前なんだよっ！」
しかし、こみ上げてくる怒りは収まらない。
「あほぅ――それは、こっちの台詞だ」
乱れた衣服を正しながら、ミカエルは呆れたように言った。
「――んだってっ！？」
「ミュウは、おめぇみたいなぼんくらがの方がいいっつってんだよ。……そばにいて、そんなことも気がつかんのか……ばかたれが」
「――まて……じゃ、なんでそわそわしながらお前が来るのを待ってるんだ？」
「しるかっ。――んなの、本人に聞けよ――」
と、ミカエルが目をやった先――ドアのところに少しおびえたミュウが立ちすくんでいた。
「……あ、の……。大きな音がして……怒鳴る声が聞こえたから――」
「……。――入れよ、ミュウ」
ルシフェルの迫力に、逆らえないミュウ。ルシフェルはむき出しになった感情をもはや隠そうともしなかった。
「……お前の、気持ちを聞かせろ。――でねぇと、いくらやっても答えは出ん――」
「私……は――」
つい、助けを求めてミカエルのほうへ視線を送る。その視線の意

味を誤解したルシフェルは、ミュウから目を逸らし拳で床を殴りつけた。一方、ミュウの視線の意味を理解したミカエルは、優しい笑顔で力強く頷く。
「私が……お慕い……しているのは――」
ミュウはそこで一旦言葉を切って、身を固めて床を見つめるルシフェルと力強く見つめてくれているミカエルを交互に見た。
――ほんとうに、この気持ちを口にしていいのだろうか……。
ミュウの中で、本当ならミカエルに相談するはずだった、あの答えのない疑問がぐるぐる回り始める。このまま、本心を口にして、ルシフェルとの関係が壊れるのが、怖かった。
どれほど考えても、答えが出るはずがない。
重い沈黙に耐えきれなくなったのは、ルシフェルだった。
「――くそっ、もういいっ！！　てめぇら、二人で勝手にやってろっ。――オレは、出かける。……部屋、使っていいぜ」
「ルシフェル様、どちらへ――」
慌てて、いつもの習慣で行き先を問うミュウ。
「ジイ様んとこだ」
吐き捨てるように答えると、ルシフェルは殴られて乱れた普段着のまま着替えもせずに、ふいっと部屋を出て行った。
「……あのバカ……完全に、誤解したな――」
「――ミカエル様……」
泣きそうになりながらも、何とかこらえ、ミュウはミカエルにすがるような視線を送った。
そのいじらしさに思わず目の前の少女を胸に抱きたくなる衝動を何とか抑え、ミカエルは、優しく微笑み返す。
「ミュウは、何も悪くない。――自分の、本当の気持ちに気がついたんだろ？」
ミュウは、小さく頷いた。と、同時に、あの疑問が頭をふたたび支配し始める。
「……でも……。――どうしていいのか……わからなくて。――で、

ミカエル様にご相談を――と、ずっとお待ちしてたのです」
「成程。――で、ルシフェルは、君が俺を待っているのに気がついて、そこへ丁度俺が現れたというわけか――」
ミカエルの中で欠けたピースが、ぱちんとはまった。
――あいつ、自分でも気がついてねぇみたいだが……ただのみにくい嫉妬じゃねーか。
ミカエルは、今まで見せたことのないルシフェルの激しさを思い出して、苦笑した。
「――心配するな。俺はいつでも君の味方だ。……困った時は、いつでも呼んでくれればいい。俺は、君の幸せのためなら、いくらでも協力するから――」
今にも泣きそうな顔で心配そうに見つめるミュウに、ミカエルは力強く笑いかけた。
「……今は、とりあえず、ルシフェルの出方をみよう――」

決心（1）　―ルシフェル―

長老に会いに行った日以来、ルシフェルは執務室にこもりっきりになった。はじめは、よほど大きな任務をまかされたのだ、とミュウを始め周りの者は思っていた。ミュウは、例の一件でルシフェルと顔を合わせづらいと思っていたので、それはそれで幸いでもあった。

しかし、ルシフェルが部屋から出てこなくなって一週間ほどたったころには、別のうわさが立ち始める。

頭が切れ、処理能力も高いルシフェルが、そういつまでも部屋にこもって仕事ばかりしているというのもおかしな話。一体どれほどの仕事を任されたのだろう。女性関係を始め、もともと長老達に従順ではなかったルシフェルが、罰を受けているのではないのか？

などという声も聞こえ始め、そんな噂を聞くにつれ、ミュウは少しずつ不安になってきた。

真偽はどうかわからない。ただ、わかっているのは、ルシフェルが部屋から出てこないという事実だけ。

なにか、よくないことが起こっているのかもしれない。

そう思い始めたら、ミュウはいてもたってもいられなくなった。ルシフェルに何かが起こっていると考えるだけで、例の一件など、どうでもよいことのように思えた。

「――まずは、ルシフェル様の様子を確認しないと……外からそぉっとのぞくくらい、いいわよね」

自分にそう言い聞かせて、ミュウは音をたてないように気をつけながら、ルシフェルの執務室の窓の下まで近づく。

「てめぇ！　ふざけんなっ――」

とそこへ、窓が少し開いていたのか、頭の上から大きな怒鳴り声が響いてきた。

「――きゃっ。……ごめんなさいっ」

頭を抱えて小さくなりながらミュウは部屋の中には目も向けず即座に謝罪したが、中から響いてきた声はミュウの謝罪を無視して言葉をつづけた。
「なんで、ちゃんと説明しねぇんだよっ！！」
――ん？　せつめい？？
先ほどの怒声はどうやらミュウに向けてではないらしい。
よく聞いてみると、声も、ルシフェルのとは違う。
あの声は――ミカエル様？
ミュウはそぉっと窓から中をのぞき見た。
ミカエルが、怒りをむき出しにして机越しにルシフェルの胸倉をつかんでいるところが見えた。ルシフェルは窓に背を向けて座っているのでその表情はわからないが、おそらく、いつものようにどんな感情も出さずに冷やかにミカエルを見ているに違いない。
窓のほうに向いているミカエルに見つからないように、念のためミュウは再び窓の下に小さくなった。
少し開いた窓から、ミカエルの熱のこもった声が聞こえてくる。
「――いきなり、俺に天使長の座を譲るって言われたって、何のことかわかんねぇっていってんだよ！！」
天使長の座を、ミカエルに譲る――それは、つまり、これからはミカエルが大天使を含め全ての天使たちのトップに立つということを意味する。
「――お前、自分にできるかどうか、不安なのか？」
低い声が嗤いとともに、ミカエルを挑発するように発せられた。
「ばっ……！　――んなわけあるかよ！！　むしろ、女にしか目がねぇお前よりは適任だと、ずっと思ってたさ」
「なら、いいじゃないか。――長老から任命されたんなら、それに何も言わず従うのが大天使ミカエルだろう？」
胸倉をつかんでいるミカエルの手を何でもないようにはずし、ルシフェルは立ち上がった。
「そうじゃないっ！　俺はただ、訳が知りたいだけだ。いきなり呼

びつけられて、『お前を天使長に任命する』といわれたって、納得できるかっ！」
納得できないところは、まだあった。
天使はもともと役割を持って生まれる。天使長としての役割を持って生まれたなら、何があっても天使長であることは変えようがない。それが、なぜ今頃になって、ルシフェルの天使長の任を解き、ミカエルに任せるのか。そして、その存在理由の一つであった「天使長」ではなくなったルシフェルが、この後、どうなるのか。
「……。では言ってやろう。オレは、ジイ様たちに愛想を尽かされたんだ。こんな素行の悪いオレが天使長だなんてってな。――さ、これで納得できただろう？　まだ片づけなきゃならん仕事があるんで、そろそろ引き取ってもらえないか？」
そう言い捨てたルシフェルは何かを隠しているようではあったけれども、ミカエルがこれ以上どう言ってみても答えは変わりそうになかった。
「……そうか。……。最後に、友として聞かせてくれ。――天使長をやめたお前は、どうなるんだ？」
ミカエルはまっすぐルシフェルの瞳を見つめた。
――自分にだけは、本当のことを言ってほしい。
その思いを込めて。
しかし、ミカエルのその思いが伝わってくるだけに、ルシフェルは目をそらし、口を噤むしかなかった。口を開けばこの悪友に、先日のことを含め、余計なことまで言ってしまいそうで――それだけは、したくなかった。
ルシフェルは何も言わず、ミカエルの背を押し、ドアの外へ促した。
ミカエルは何かを感じ取ったのか、すでに抵抗する気もなく、ルシフェルに背を押されるまま部屋を出る。
閉めたドアにもたれ、もう少しで溢れそうな思いを抑えつけるように、ルシフェルは小さく呟いた。

「――オレに聞かずとも、いずれわかるだろうよ……」

あまりの話の展開に、茫然となりその場を離れるタイミングを逃してしまったミュウは、窓の下で声を漏らさないように口を押さえて、ミカエルとルシフェルの話を聞いているしかなかった。

ルシフェル様が天使長を解任――！？　なんだか、大変なことを聞いちゃった……。

あまりにもショックが大きく、自分の今の状況などすっかり頭の中から追い出されてしまっていた。

「――盗み聞きか、ミュウ。……イケナイ子だ」

頭の上から突然振ってきた声に思わず見上げると、唇の端に困ったような笑いをたたえたルシフェルの顔が突き出ていた。

「……ルシフェル様――」

先日見せた激しい熱さは、まるで夢だったかのようにどこにも感じられない。顔を合わせたらどうすれば――と、ずっと悩んでいたミュウは、いつものルシフェルに、少し安心する。と、同時に、先ほど耳にした話が思い出され、驚きと、切なさがミュウの胸を過った。

「……ったく。なんて顔してるんだ。――いいから、こっちへおいで」

たくましい腕にふわりと抱きあげられて、ミュウは窓越しに部屋の中に入れられる。

「――だって、ルシフェル様……」

自分でもなんだか分からないけど、ミュウは半分泣き出していた。

「――。……まぁ、そういうことだ。――お前のせいではないよ」

何でもないというように首をかしげて見せるルシフェル。

また、あの瞳だ。甘いけれど、切ない――瞳。

気がつくとルシフェルはいつもやりきれない瞳をしていた。その目を見るたびミュウは、ルシフェルに気の利いたことも言えず、何もしてあげられない自分がとてももどかしかった。それどころか、

そんな風に笑って見せてくれるルシフェルの目の前で泣いて、反対に心配をかけている。
これでは、ルシフェル様の部下失格だ。
そう分かっていても、胸の奥からこみ上げてくる思いと涙はどうしようもなかった。
「ルシフェル様……ふえっ……っく――」
ミュウは執務室のルシフェルがいつも使っている椅子に腰かけさせられた。彼女の前に片膝をついてそっと両手で彼女の手を包んだルシフェル。ミュウはその優しくて温かい大きな手に安心する。
「……ミュウ、オレは……おそらく、オレにしかできない――とても大きな任務を負ってきた。――それは、とても光栄なことだ」
ミュウにそう諭すように語りかけながら、彼は強い精神力で、自分の中で暴走しそうな不安を抑えつけようと、自分自身にも言い聞かせていたのかもしれない。
バラの描かれた美しいグラスにおそろいのサーバーから水を注ぎ、ミュウに手渡して、自分も別のグラスに入った水を呷る。
「――それを飲んで、落ち着いたら……ホールに全員集めてくれ」
そう言い終わったときには、もう瞳にあの切ない影を含んだルシフェルは消えており、かわりに、部隊の長としての威厳をまとったルシフェルがいた。

決心（2）　―ミュウ―

ルシフェルの部隊はいくつかのチームに分かれており、それぞれが独立して特殊な任務を受け持っている。そのチームがそれぞれきれいに整列している様は、まるで学校の朝礼のようだ。その中で、ミュウは一番隅の列に、ひとりぽつんと立っていた。どのチームにも属していないのだ。

ミュウは、自分の能力ではチームに入れないのも無理のないことだと思っている。天使のエリートばかりが集められたルシフェルの部隊の中で、経験も能力も低い自分では約不足という以上に、はっきり言って重荷だということも分かっている。部下として――といえるのか、ミュウがやっていることと言えばルシフェルの雑用のみ。ルシフェルのそばにいられるので不満があるわけではないが、このように全員が整列するときは、ひとりだけ隔離されているようでとても居心地が悪い。

そこへ、正装のルシフェルが壇上に現れた。全員に語りかけているルシフェルは、威風堂々としていてみんなを引っ張っていく統率者としてのオーラを纏い、とても凛々しい。窓から差し込む光がルシフェルの周りを美しく彩っている。

やはりルシフェル様は光の天使なんだなぁ。――遠くから見ても、とてもまぶしくて美しい――。

そこに立つルシフェルは、ミュウがいつも接している意地悪な瞳のルシフェルとは別人のようで、キラキラまぶしくまるで手の届かないような存在に感じた。

「――そして、新しい任務が与えられ、私は天使長の任を解かれた。……今後、チームリーダーたちには今まで以上に大きな責務がのしかかるかもしれんが、そのつもりで。――それぞれのチームには個々に指示を出すから、呼び出しがあるまで部屋で待機しておいてくれ。では、解散――」

ルシフェルがステージから降りると同時に、今までとても静かだったホールの中にざわついた雰囲気が一気に広がった。どの天使も、ルシフェルの天使長解任について動揺を隠せないようだ。みんな気の合う同僚たちとそれについて話し合いながらホールを後にしていった。

ミュウは仲の良い同僚がいるわけでもないので、ひとり自室へ戻り、雑務をこなしながらルシフェルからの呼び出しを待つ。

ルシフェルから呼び出されたのは、翌朝になってからだった。

ミュウを部屋に迎え入れるルシフェルには、すこし疲れが見られる。

「ルシフェル様……まさか、休憩も取らずこれまでずっと会議を――」

会議の合間に休憩をとったとするなら、ミュウにお茶を入れさせるはずだ。だが、昨日のホールでの集会以降、ミュウは一度も呼ばれていない。

「……ああ、思ったより、長くかかったな――」

いつもの笑いを口の端に見せながら疲れを帯びた目でミュウを見るルシフェルは、悩ましいほどに魅力的だ。

ミュウを三人掛けのソファに座らせ、自身もその横へと腰を下ろした。

いきなり隣に座られてびっくりするミュウ。またいつものからかいなのだろうが、いちいち気になって反応してしまう。

次第に、ルシフェルの体の重みが右肩にかかってきて――。

「……ルシフェル様――」

思わず赤面しながらルシフェルのほうに目を向けるように体を少しずらすと――。

ずっ――。

ルシフェルの上半身の重さががさらにのしかかり、そのまま彼の顔がミュウの胸のあたりに降りてきた。

――こ、こ、これは……ひょっとして――。
ミュウの頭の中は、もうすでに妄想が走り出している。
――わわわ、わたしで、いいのですか？　……こうなったら、もう、覚悟を決めます――！
と、ルシフェルの次の行動を待つも、その先に進みそうな気配はどこにもなかった。
耳に入ってくる規則正しい、息の音。
「……あ、……れ？」
よほど疲れているのか、ルシフェルは眠ってしまっていたようだ。
安心したようながっかりしたような気持が、ミュウの胸の中に湧き上がってくる。
と、そのとき、先日のミカエルの言葉が脳裏を過った。
『――でも、相手がルシフェルだったら君はどうしただろうね？』
相手がルシフェル様だったら――私は……。
答えはもうそこにあった。
私は――その先どうなろうと、覚悟して、その腕を振り払わなかった。
やはり、ミカエル様を好きな気持ちと、ルシフェル様を好きな気持ちは……ちがうのかな？
ミカエルはいつもミュウのことを心配して、いろいろと声をかけてくれる。ルシフェルと違っていつでも優しく気遣ってくれるし、そういう面で、ミュウはミカエルが大好きだった。しかし、ミカエルの腕に抱きしめられて、その先を――と考えると、その先なんて想像つかないし、むしろ、体が先に抵抗する。
ミカエル様が嫌いなわけではない、むしろ、好き。――でも、その気持ちはなんだかふんわりと包み込むような、家族みたいな暖かさを伴ったもので、ルシフェル様に対しての想いは……もっと熱さと苦しい激しさを感じるのだ。
そして、思う。
――コノヒトヲ、ヒトリジメシタイ――

ミュウはルシフェルの頭をそっと自分の膝の上に誘い、じっくりとルシフェルを観察した。無造作に顔にかかる黒い髪。近くで見ると思った以上に長い睫毛。威厳も冷徹さもまとっていない――無防備な寝顔。

こんな風に眠っているルシフェル様を見るのは、初めて。――しかも、私の膝枕で……。

目をつぶって穏やかに規則正しい寝息を立てているルシフェルは、壇上で自信たっぷりに上から見下ろしたり、口の端を少し上げてからかったりするルシフェルとはまた違って、無垢で安らかな神々しさにあふれていた。

ルシフェルにしてみれば、疲れていたとはいえ、他人の前で居眠りをするなど、ほかの部下達には見せたくない醜態の部類に入るだろう。おそらく、ベッドをともにした女たちに対しても。そう考えると、ミュウは、今目の前にいる無防備なルシフェルが自分だけのもののような気がして、うれしかった。

このまま、時間が止まってしまえばいいのに……。

ミュウはルシフェルの髪を撫でながら、深い意識の底へ沈んでいった。彼女もまた、ルシフェルから呼び出しを、寝ずに待っていたのだ。

決心（3）　―ルシフェル×ミュウ―

「――？」

気がつくと、真っ白な天蓋が目の前に広がっていた。自室のベッドに天蓋など付いていないが、この天蓋はどこか見覚えのある――こんな風に見上げたことはないが、ルシフェルの寝室のベッドのものによく似ている。

「――ミュウ……よく眠れたようだな？」

耳のすぐそばで囁かれた少し掠れたその声は――。

「――るるる、るしふぇるさまっ！」

予想外の展開にミュウはびっくりして半身を起し、声のしたほうへ振りかえった。

ミュウが起き上ったためにシーツが半分廻れ上がり、ルシフェルのたくましい胸が露わになった。

くすりと笑い、ルシフェルは肘で身を起こす。いつもの、ルシフェルだ。

ミュウは自分の恰好を改めて確認する。

全裸ではなかったものの、下着姿であった。あわてて、シーツをきつく体に巻きつける。それに合わせて、ルシフェルの体はさらに露わになる。――シーツの下はわからないが、ルシフェルは少なくともその上半身には何も身につけていない。

ミュウは目のやり場に困り、ルシフェルに背を向けた。

「――ルシフェル様……わたし……」

ベッドの後ろでルシフェルが動く気配があった。ミュウは、体をこわばらせる。

ギッ……。とベッドがきしみ、衣擦れの音がしたかと思うと、ガウンをはおったルシフェルがミュウに制服を差し出た。

「――すてきだったよ、ミュウ――」

いたずらな瞳に、口の端だけの笑み。

――これは、いつものルシフェル様……。
いままで何度もその先を期待させては、裏切られてきたその時のルシフェルと、同じ表情。
少し考えて、ミュウは静かに聞いてみた。
「……からかってらっしゃるんでしょう？　ルシフェル様」
聞くべきではなかったかもしれない。からかわれていたにしても、寝ているミュウを、強引に抱いたのだとしても――。ルシフェルへの想いを確信してしまった今、どんな答えをもらおうと、ミュウの心が痛むのは同じだった。
もしも、本当にルシフェルに抱かれたのだとすれば、たとえ心の奥で期待していたとしても、自分の知らないうちに了解も取らず、記憶にも残らないような、そんな強姦まがいなことをするルシフェルの無神経さが許せない。また、ただからかわれているだけというのも、自分の気持ちに気が付いてしまった以上、苦しさだけしか残らない。
ルシフェル様に求められ、優しく愛してほしい、体だけでなく心も通い合いたい――と思うのは、きっと叶わない望みなんだ。ルシフェル様にとって、私は――ただの面白いおもちゃというだけなのかもしれないのに……ただ、いつも近くにいさせてもらえて、自分だけは特別だ――と、勘違いして……。ほんと、ばかみたい――。
今まで胸の隅っこに閉じ込めておいた不安が蓋をあけて襲ってきて、ミュウはルシフェルの答えを聞くのが急に怖くなった。そして、彼の手から制服を奪い取りシーツをまきつけたまま、その心の声から逃げるように部屋を後にする。
いつものミュウの反応とは明らかに違うのを感じ取ってルシフェルは、戸惑った。
――泣いていたのか？
ルシフェルは、確信はなかったが、ミュウが泣いていたような気がした。
よくわからないが、胸の奥が少し苦しい。

ルシフェルは、今自分を襲ったこの感情が何であるのか冷静に分析しようと椅子に腰かけ、グラスに注いだ水を大きく呷った。

「――おい、いま、ミュウが――。――貴様っ、ミュウに何をした――！？」

ノックもせずルシフェルの寝室に遠慮なく入ってくるのは、ミカエル以外いない。

裸体に直接ガウンをはおったルシフェルと部屋の様子を一目見て、ミカエルはすぐに状況を理解し、思わずルシフェルに殴りかかった。いつものルシフェルなら、すぐに避けられただろう。だが、このときの彼は違った。

左頬に思いっきりミカエルの一撃を受ける。

まさか相手が避けもしないとは思わなかったミカエルは、自分の拳が当たったので驚いた。

「――っってえ……・」

椅子の横に尻をつき、左頬を押さえながら、ルシフェルは、それでもミカエルに何も言い返そうとしなかった。いつもの彼なら、冷やかな瞳でクールなセリフを吐くところだ。が、この日のルシフェルには、いつもの切れも鋭さも見られなかった。いや、むしろくすぶった熱さを何とか鎮めようとしている様さえ見られる。

ミカエルは、ルシフェルの腕をつかみ椅子に座らせてから、彼の目の前にもう一脚椅子を持ってきて、背もたれをまたいで座った。

「……お前……今日こそは、本当のことを、話せよ――」

「――結局、ルシフェル様から今後の指示をもらってくるのを忘れてしまった――」

何も考えずに寝室を飛び出して戻ってきたのは、やっぱり、部下としてまずかった。部下なら上官の命令は絶対だし、あんなふうにからかわれるのは、今日に始まったことではない。また、記憶がないにしろルシフェル様とベッドを共にできたのだとしたら、いまま

で散々妄想してきたことが実現したのだから、むしろ喜ぶべきことだ。
――では、どうしてこんなに苦しいのだろう？
自己嫌悪に陥りながら、ミュウの心の中は同じ問いがぐるぐる駆け巡っていた。

「――単刀直入に聞くぞ、まずはミュウのことだ。……お前、無理やりあいつをモノにしたのか？」
ルシフェルは、自分の心の中に先ほどの感情の正体を確かめようとしていた。ミカエルの声など届いていないかのようだ。
こんなふ抜けたルシフェルなんて、今までに見たことがねぇ。
ミカエルの中に苛立ちが湧き上がる。むしろ、こんなルシフェルを、見たくない。
「……ミュウ、走りながら泣いてたぞ」
どんな言葉なら、ルシフェルに届くだろう。
そう考えて、出てきたのは、ミュウのことだった。
「――そう……か。――泣いてたか」
そう繰り返しただけで、ルシフェルの心にあの苦しさが生々しくよみがえる。
「お前、あいつに、何したんだ！？」
ルシフェルが反応したところへ、すかさず質問で攻めるミカエル。
「――何って……何にも、できなかったさ。――このオレが――」
ルシフェルは空中を見つめて自嘲するように薄く嗤った。
「何にもって……じゃ、どうしてミュウはあんなふうに泣いて出ていくんだ――？」
「それは、こっちが聞きたいくらいだっ！」
口を開くと、抑えられないもどかしい感情が溢れて、どなり声になった。
「お前、――今まで他人を好きになってことなんて、ねぇだろ？
だから、好きになった女の気持ちが、わからねぇ――」

ミカエルは、ミュウの幸せのために動くと誓ったのだ。ミュウがルシフェルと結ばれたいと願うなら、そうさせてやりたかった。たとえ、その相手がこの目の前にいるいけすかない男であっても――。

「……」

先日のことと言い、あの冷静沈着で鋭い切れを持つルシフェルが明らかに感情に振り回されている。そのどれもが、ミュウがらみだ

「あー、もう、はっきりさせちまえよ。お前、ミュウが好きなんだろ？」

「……。あいつを傷つけたくはないし、守ってやりたい……あいつを他のだれにも――たとえお前であっても、渡したくない……とは、思う――」

ルシフェルは自分の気持ちを確かめるようにゆっくりと言葉を選ぶ。

「お前――ミュウを抱きたいと思うか？」

ミカエルは、ルシフェルのミュウに対する気持ちが家族としてのものなのか、女としてのものなのか、確信したかった。

「そうだな――。あいつが狂おしいほどにオレを求めるんなら、オレを忘れられないくらいに刻み込んでやりたいとは思うが……寝てて記憶に残らんなら、意味ねぇし――」

ミュウとのことを想像し、くくっと口の端で笑いながらそう言ったルシフェルの表情は、ミカエルがこれまで見た中で一番幸せそうだった。

と、ルシフェルの表情がとたんに曇る。

「……ミュウのこと……頼む――」

ミカエルから目をそらしながら、ぽそっとルシフェルが小さく言った。

プライドの高いルシフェルがその言葉をどれほどの想いをこめてミカエルに言ったのか。

「ミュウの件は――任せろ」

ミカエルは彼の下した重大な決断から導き出されたのであろうそ

の言葉を、しっかりと受け取り力強く頷いた。
「……そろそろ、身支度を整えろよ。――次は、仕事の話だ」
ミカエルは立ち上がりルシフェルの肩に手を置いた。
「――オレに男の前で、着換えろと――？　――執務室で待ってろ」
肩におかれた手を振り払いながら、そう言い放ったルシフェルの口調は、すでに仕事モードに切り替わっていた。
ミカエルは、椅子から立ち上がって背を向けたルシフェルを確認し、廊下へ出る。そして、寝室から執務室へと向かいながら、長老との会見を思い返していた。

決心（4）　―ミカエル―

「――新しい天使長として、全ての天使について把握しておくために、教えてください、長老。……天使長を解任されたルシフェルは、いったいどうなるのですか？」

ルシフェルに聞いてもらちが明かないと理解したミカエルは、直接長老に話を聞きに行ったのだ。

「ここだけの話に留めおいてくれるな、ミカエル？　――あれには、次の任務を申し渡してある」

硬い表情で答える長老の一人。

「――次の任務――？」

「低次元界の制圧だ」

「低次元界の……制圧？」

低次元界、すなわち、人間界の下に位置する、いわゆる「魔界」だ。

「あそこは、混沌としておる。このままでは人間界に思いがけない影響を与える可能性もある。ルシフェルはずっと、秩序を生むために誰か『上』に立つものが必要だと提言しておった。――そして、とうとう先日あいつが決心したと申し出てきた」

先日――ルシフェルと殴りあった日か――？

「なぜ、天使長自らその任を解いてまで出向く必要があるのですか？　制圧が必要なら、私の部隊を派遣しても――」

「力が必要なのではない、あそこに必要なのは、強い統率力だ。……わしらは、適任はルシフェルしかおらんと思っていたし、あいつ自らもそう判断し、ようやく決断した。……解任については、あいつの意見だ。天使長自ら魔界に降りたとなれば上も下も大騒ぎになるであろうから、そうなる前に自分を解任しろ――とな」

「――そんなことをして、なんのメリットがあるというのか……」

「メリット……かどうかわからん。が、あいつ自身そこへ出向かう

ことが必要と感じておるのじゃろう。……ルシフェルは、ずっと探しておった。――足りない何かを、な」
あれだけ全天使の信頼と尊敬を集めている全能のルシフェルに、足りないものがあるというのか？
ミカエルは頭がくらくらしてきた。天使は完璧に作られているという観念が元から崩されたというのもあるし、ルシフェルがそれをずっと感じていて、足りない何かを探し続けていた――というところにも、自分とルシフェルの器の大きさの違いを感じずにはいられなかった。
「……魔界に、それがあるとでも――？」
「天使が求めるものが魔界にあるかどうかというのは、愚問だな。……ただ、そこにはなくても、行動は『きっかけ』になる。ルシフェル自身も『魔界に行くことでそれそのものか、あるいはそれを得る手がかりが得られるかもしれない』と考えたから、決断したんじゃろう」
「長老方は――ルシフェルの求めるものが、本当はどこにあるか、ご存知なのですか？」
「――それも、愚問だ、ミカエル。……ヒントは与えてあるはずだがな」

決心（5）　―ルシフェル×ミカエル―

確かめてどうしようというわけではなかった。ただ、ルシフェルが魔界に降りる前に、ルシフェルと話をしておきたかっただけだ。

執務室に現れたルシフェルは、いつもの自信に溢れるルシフェルに戻っていた。まるで先ほど寝室にいたルシフェルが偽者だったようにさえ感じる。

「――待たせたな。……で、その『仕事の話』とやらを聞こうか？」

今朝方ミュウが膝枕をしてくれたソファーに座るようミカエルを促して、自分はその向かいに腰を下ろした。

「――長老から、聞いた。……魔界へ降りるんだってな」

「――へぇ、……聞き出したのか」

まさか、長老がミカエルに話すとは思っていなかったような口調だ。

「一応、天使長だからな。自分の下にいる天使がどういう状況にあるのか把握しておくのがトップに立つものの責任だろう？」

ルシフェルが天使長のころはそこまでしなかった。各自の自主性とモラルに全て任せていたからだ。しかし、面倒見がよく世話好きなミカエルなら、上司として、自分の部下のことはきっちり把握して管理するべきだと考えているのだろう。

「――ま、それがお前のやり方なら、口は挟まんが――」

自分の部隊の中ならともかく、自分ひとりで何億といる全ての天使の動向を把握しておくことなど、不可能に近い。寝る間も惜しんで仕事に励むミカエルを想像して、ルシフェルはにやりと嗤った。

「話を逸らすな。――一体、どうして魔界に降りるなんて――」

「ジイ様から聞いたんだろ？　オレ様が、魔物の頂点に立つ。――素行不良の大天使の処分もできて、あいつにしてみれば一石二鳥の計画というわけだ」

ミカエルは彼の、その様子が心の奥深い所にある本当の意図を隠

そうとしているように感じられて、嗤う気にもなれない。
「お前が、志願したと聞いたが――」
ルシフェルの表情が、すっと無表情になった。まるで、心の中を見透かされまいとにシャッターを下ろしたかのように。
目を閉じて自分の心の中を確かめるようにした後、目を開けたルシフェルは、いつもの冷たい視線もにやけた口元も浮かべていない、むしろ、すこし照れたような表情の素のルシフェルだった。
「……。そこまで話したのか――。ま、別に隠すほどのことでもねぇが……」
「――本当なのか？」
「……ああ。――ずっと、ここではないどこかに行ってみたいと思っていた。……なぜかはわからん。ただ、いつからかオレの中には『何かが足りない』ということに気がついた。自分の心の中で、何かがちょっとだけ、欠けている――それを、探したいと思ってた。その『何か』を手に入れた後、どうなるかさえ想像もつかんが、ただ、手元にないんなら、探さなければ――と思っただけだ」
そこでルシフェルは、まるで心の中のその小さな隙間を確認するように、少し間を置いた。
「お前と殴りあったあの日、やっと決心がついた。――それまではミュウのことが心配で、側で守ってやりたくて――ミュウを置いて行くなんて考えられなかった。……けど、ミュウも大人になって、オレの手を放して誰かの元へ行きたいというのなら……今が、『その時』なのかもしれない――と決心した」
それは、誤解だと、いまさら言っても、もう遅い――のかもしれない。
ルシフェルが、そう決めたのなら、いまさら誤解だといったところで、この決断を反故にはしないだろう。
ミカエルはルシフェルの話を聞きながら、どうすることがミュウにとって、自分にとって、ルシフェルにとって一番いいのか、考えていた。

「――なあ、ミカエル。……天使は、本当は、完璧ではなく……オレたちも人間と同じように、目的というか――、求めるべきものというか――、とにかく進むべき道があるのかもしれんな――」
自分にはない「探究心」――やはりルシフェルにはかなわないと、ミカエルは思った。
「……そうだな」
ミカエルは、自分の中で生まれた決意を確かめるように、そこでいったん口を噤む。そして自分の決断を心の中で噛みしめてからゆっくりと口を開いた。
「――いいか、お前のその特別な任務の間だけ、天使長の代理をやってやる。――お前の事情を知った以上、知らんふりをするわけにもいかんからな。……だから、その任務、絶対成功させて帰ってこい。――俺からの命令だ」
ミカエルは拳を作り、ルシフェルのほうへ差し出した。ルシフェルも自分の拳をそれに軽くぶつける。
「……マジで……ミュウを、頼んだ――」
二人の拳が離れそう言ったルシフェルの腕を、その手でミカエルが捕らえた。
「――お前、まさか、ミュウに黙っていくつもりじゃないだろうな？」
ルシフェルは、そのつもりだった。先日のことや今朝のこともあるし、第一どんな風に説明していいのか、わからない。
「……何を、話せというんだ――？」
「――すべてを……だ」
「……どう話していいかわからん。――こんなこと、話したところでミュウを寂しがらせるだけだ」
ルシフェルはミカエルの腕を振り払う。
「逃げんなよ。――俺たちは、ミュウに対して責任がある。……お前がそれを放棄したと思わせたくない。――それに、ミュウが悲しまなくていい方法を考えてみても、いいんじゃねぇか？」

それに、誤解させたままでルシフェルを行かせるわけにはいかない。
「何を企んでいる？」
「人聞きの悪い――俺は、ただミュウの悲しむ顔を見たくないだけだ」
「……天使長としての、――命令か？」
「そう思いたいなら、それでも構わん」
ミカエルは口の端で不敵に嗤った。

ミカエルの命令（1）　―任務―

「――くそ……。ミカエルの野郎、天使長になったからって……命令、命令と――職権乱用だっ！」

ルシフェルは執務室の机に両肘を突いて頭を抱え、ミュウに何をどう話すべきか、迷っていた。

そこへ、ためらいがちなノックが部屋の中に響く。

「――ミュウか。入れ」

そっと開いたドアから、ミュウが首を出した。

「――どうした？　さっさと入って、ドアを閉めろ」

先ほどの泣きそうなミュウの顔が脳裏によぎり、と同時に、あの時の苦しい気持ちがルシフェルの胸によみがえってきた。そして、そのわけのわからない忌々しい感情に、ルシフェルの言葉が苛立ったトーンを乗せて、ミュウの心に突き刺さる。

ルシフェルの苛立ちをまともに受け、ミュウは申し訳なさそうに部屋に入って、パタンとドアを閉める。

明らかにいつものミュウではなかった。どこを見てよいのかわからず、視線が彷徨っている。

ルシフェルはドアのところに立つミュウに、誤解を与えないよう慎重に言葉を選びながら話しだした。

「――オレは……自分から天使長の解任を迫った――」

ルシフェルはミュウに、自分に与えられた任務、天使長の辞任の理由、これからの予定について説明した。

「とりあえず、ここでの仕事のめどがついたら、オレは、『罪』を被って部隊を連れ魔界へ降りる。これは、天使界でも知っている者はトップクラスのみの極秘任務のため、ほかの天使のカモフラージュだ――」

まるで子供に昔語りを聞かせるかのように、ゆっくりと、言葉を紡いでいくルシフェル。

だから、ルシフェルは魔界に降りる前に、ミュウをミカエルに任せ、彼の部隊に入れていこうと考えていた。魔界につれて行くよりは、ミカエルの下にいたほうがミュウにとっても安全だし、ミカエル以外にミュウを任せられるものはいないと思っていたから。

しかし――。

「ミュウには……、やってもらいたい任務がある。――天使界と魔界の、連絡員だ」

これも、ミカエルの『命令』の一つだった。ルシフェルは自分の意図に反したその言葉を苦々しく口にした。彼は、ミュウをルシフェルの部下のまま置き、しかも、魔界に行かせるなどという、危険な任務を彼女に与えろと言うのだ。

だが、この言葉を聞いたミュウの表情が一瞬明るくなったのをルシフェルは見逃さなかった。

いままでルシフェルがミュウに『任務』として自分の仕事の何かを与えたことは、なかった。ルシフェルの部隊に振られる任務は、たいていが高い能力と経験が要されるものであったし、それらをこなすにはミュウはまだ経験不足過ぎる。――とはいえ、ミュウの経験値が上がらないのはルシフェルの過保護という理由もあったのだが。

ミュウは、主に、ルシフェルの身の回りのことと屋敷のことを任されてはいたが、それは『任務』と呼ぶにはほど遠いものであった。だから、ミュウにとってルシフェルの仕事の一部を任務として与えられることは、とても光栄なことだったのだ。そして、そのことをルシフェルはこのとき初めて理解した。

ミカエルのほうが、よほどミュウをわかっている――。ま、だからこそ、ミュウもあいつを選んだのかもしれないが……

ミュウがどうすれば喜ぶのかさえわかっていなかった自分が情けなくなってくる。

「――はい」

ミュウはルシフェルの気持ちなどもちろん知る由もなく、満面の

笑みで返事をした。
ルシフェル様のお仕事が手伝える！
重要な任務を果たす彼を手伝えるのだ。それになにより、連絡員となれば、魔界に行った後のルシフェルの状況も直接確認できる。そう考えただけで、ミュウの暗く落ち込んでいた心に光が当てられたようだった。
「……危険が、あるかもしれない――それでも、やるか？」
「ルシフェル様の、ためであれば――」
ずっとルシフェルの側に――というのは、かねてからのミュウの願いである。仕事とはいえ、側にいさせてもらえるのなら、危険などどうということはない。
「――わかった。では、その仕事をお前に任せよう」
彼女の心が別にあったとしても、ミュウの顔を見られないよりは、ましだ。なにかあれば、守ってやることくらいはできるだろう。――そのほうが、オレも安心できる……か。
そこでルシフェルは、気がついた。
これが、ミュウの気持ちもルシフェルの気持ちも考えてのミカエルの『命令』だとしたら――。
ルシフェルは、ミカエルに負けたような気がして、ふ……と苦く笑った――が、悪い気はしなかった。
「さて、これからの任務についてはここまでだ」
ルシフェルが椅子から立ち上がながらそう言ったので、ミュウは敬礼して彼に背を向けた。

ミカエルの命令（2）　―明かされた気持―

ドアを開けようとノブに手を伸ばしたとき、ふわりといきなり温かい感触がミュウの背中を包み込む。

「――！　ルシフェル様……」

一瞬ミュウはびっくりしたように身を縮めたが、後ろから抱き締めてくるルシフェルに対して抵抗を見せることはなかった。

その反応にルシフェルのほうが戸惑う。

後ろから抱きすくめれば自分の顔を見られなくてもすむと思ったのは、せめてものミカエルに対する抵抗だった。ニヤついたミカエルの顔と言葉――命令が、ルシフェルの頭を横切った。

『――まず、ミュウを抱き締めて、謝れ。それから素直に話せ』

ミカエルにそう言われたときは、一瞬不安がよぎった。ミュウをさらに傷つけることになりはしないか。また泣かせてしまうのではないか。しかし、それを恐れているとミカエルに思われるのは癪だったので、それについては反論もあったが、黙って命令に従うことにした。

だが、実際にやってみて、このミュウの反応は、どうだ？

ミカエルの思惑通り、ミュウはルシフェルの胸の中で身を小さくして彼の言葉を待っているようにも見える。

ミュウに関しては、ミカエルのほうが一枚上手なのは先ほどの任務の件でもよくわかった。

いずれにしろ、命令は命令。ミカエルが悪いようにはしないだろうと信じ、ルシフェルは半ば自棄になって言われたとおり口にした。

「……さっきは――悪かった」

ルシフェルの謝罪の言葉など、ほとんど聞いたことのないミュウは思わず顔を上げた。しかし、ルシフェルが後ろからきつく抱き締めているので、振り向くことはできない。

「――まず、今朝のことだが――。ベッドに運んで制服を脱がせは

したが、それは、変な意味ではなく、ただ、ゆっくり休んでもらおうと――」ルシフェルは、今朝のいきさつをミュウに話した。「――ってことで、お前には、手ぇ、出してねぇから――安心しろ」

――くそっ。言い訳なんて、オレらしくもねぇ……。

次第に口調が冷静さを失っていき、ぶっきらぼうに話しだすルシフェルに戸惑いつつも、彼の腕の中で黙って聞いていたミュウは、その言葉にほっとした。と同時に、今まで入っていた体の力が抜ける。

「……そうですよね。ルシフェル様なら、私など相手にしなくとも――」

ミュウは薄い笑みを作り、心の隅っこに引っかかっているがっかりした気持ちになんとか蓋をしようとした。

しかし、ミュウのその反応がルシフェルの心の扉を壊す。

そうじゃねぇっ――！

ミュウを抱き締めていた腕を緩め、自分のほうへ向き直らせてから、彼女の両肩をしっかりとつかみ、熱い眼差しで見つめた。

「――お前、オレが今までどれほど我慢してきたかわかってねぇ……。今朝だって、お前をどれほど自分のものにしたかったか――。……けど、ほかの男に想いを寄せるお前を無理やりヤっちまうなんて――できなかった」

苦しさを押し込めたような低い唸り声がミュウに浴びせられる。

「――我慢って――、ルシフェル様……が、何を――？」

いつもいつもじらされて、心だけ持っていかれて……むしろ、我慢させられていたのは私のほうだ。

と、ミュウは思った。

ミュウの何もわかっていないような反応が、ルシフェルの想いをさらに加速させる。

「オレはいつでもお前をオレ一人のものにしておきたかった――って言ったら？」

くそ――ここまで言わなきゃわからんのか――鈍感なヤツめ……。

その思いがけない言葉に、ミュウは、ルシフェルを見上げた。
「お前が頬を染めてミカエルを待っていると知って、心の底から沸き起こる気持ちが抑えられなかった。――なんで、ミカエルなんだっ。――なんで、オレじゃねぇのか……てな」
ルシフェルの瞳には、今までのようにミュウをからかうような色は微塵もなかった。むしろ、流れ出てくる気持ちを何とか抑えようとする苦しさと、それでも溢れ出てしまう熱を含んでいる。
一旦開いてしまった心の扉から流れ出るルシフェルの想いは、もうどうにも止められなかった。
「言っただろ、いつ自分が抑えらなくなるか……保障できねぇ……って。……っつか、オレ、もうすでに限界――。いやなら、抵抗しろよ――」
そう言って、ルシフェルは顔を少し傾け、ミュウの唇に貪りつくように口付けた。
「――！」
……ルシフェル様……。
ミュウはその魂までも吸い取られてしまいそうなねっとりと絡みつくような熱いキスに、頭の中が痺れそうになる。
「……やっとわかった。――オレ、お前をオレのものにしたい――」
ミュウの頭を襲った痺れは、ルシフェルのこの熱い言葉に乗せられて、さらに全身へと巡っていく。
ルシフェルに両肩を掴まれているミュウは体を駆け抜けていくその甘い痺れに思考能力を奪われ、言葉を発することも、動くことすらままならず、ただただ立ち尽くして、彼の激しい思いを体に受け、心に染み込ませていた。
動けないミュウに、ルシフェルが最後にもう一度念を押した。
「もし、オレが上司だからということで抵抗できないのであれば、――これは、命令だ。いやなら、抵抗しろ。……お前がいやだというなら、オレはここで止めるし、今後一切、お前には手を出さないと約束する」

それは、かろうじてルシフェルが保った理性からの言葉だった。
「――けど、お前が拒否しないなら……お前をオレのものにして、絶対離さない。――お前が決めろ」
熱を帯びた瞳でミュウを見つめるルシフェルはもういつもの冷静でにやりと笑う「上司」ではなく、地位や立場を脱ぎ棄てて狂おしいほどにあふれ出る情熱に突き動かされた一人の「男」だった。
……いや……じゃない……。むしろ――。
ルシフェルのほうから上司と部下という関係を超えようと手を伸ばしてくれている。それは、ミュウがこの前まで見ていた夢そのものでもあった。
彼の熱くたぎる想いを全身に浴びせられて、ミュウがこれまで凍らせて抑えていた彼に対する感情もゆっくりと溶かされていく。
ミュウはゆっくりとルシフェルの首に腕を回し、ルシフェルの唇に自分の唇を重ねた。
「……私の王子様は……、あの時からずっと……ルシフェル様だけでした――」
真っ赤になった顔を彼に見られないように彼女が彼の首にまわした腕に力を込めて耳元で小さくそう囁くと、彼も彼女の背中をきつく抱き寄せた。
愛する人に抱きしめられている、ただその感覚だけで、背筋を熱いものが駆け上がり、頭の中をとろとろに溶けさせていく。
二人は、抱き合ったままどちらからともなく幾度か唇を重ねた後、場所をソファに移し、いろいろな角度から、強さを変え、体勢を変え――これまでの閉じ込めた想いを、すべて吐き出してしまおうとお互いに唇を求めあった。そしてそのたびに、蕩けた心と体に、これまで覚えたことのないうっとりとする甘くて快い感覚の波が打ち寄せる。
「ルシフェル様――今だけ……部下としてではなく――」
――女として、抱いていただけますか？
ミュウは、そう、口にしたかった。

しかし、ミュウのその溢れ出てくる想いを感じ取ったルシフェルが彼女の言葉を先に制する。
「――ミュウ、オレは――今すぐにでもお前をオレのものにしたい。壊れるほどお前を抱いて、お前の体にオレの全てを刻み付け、忘れられなくしてやりたい。……しかし――」
今ここで、お互いに全てを曝け出し、とめどなく溢れてくる愛しさに体を任せて濃密なときを過ごしたいという気持ちに嘘はない。そうすれば、――抱きしめただけでこの気もち良さだ――どれほどの快感が得られるのか、二人で試してみたい。
しかし、「今」本能に任せてミュウを抱くことが、はたして、自分にとってもミュウにとってもベストだろうか？
ルシフェルの頭に過ぎったのは、これからのことだった。
「オレは、もう天使長でもないし、魔界に降りれば『大天使ルシフェル』でもなくなる。そういう意味では、これから先、お前を今までと同じように守ってやることができるかも、わからない。それに、戻ってこられる保証もさえないし、たとえ戻ってこられたとしても、今と同じオレでいられるかもわからない――」
だから何も言わず、ミュウをミカエルに託して行こうとしたのに――。
ルシフェルの眉根が苦しそうに寄った。
「つまりそれは――お前が好きになってくれた『今のオレ』に、二度と会えなくなるかもしれないということだ。……そして、今ここで、お前の中にオレを刻むということは――お前を苦しめることになるのかもしれない――」
オレは、絶対にミュウを苦しませたくない――。
あれほど強く求めたものが、今自分の腕の中にあると思うと、今度は、自分の手でそれを壊してしまうのが怖くなった。
ミュウはそれを聞いて何かを考えているようであったが、やがて顔をあげてにこりとルシフェルに微笑んだ。
「ルシフェル様は、ルシフェル様です。……どんなふうに変わられ

ても――」
その言葉に、ルシフェルは心を救い上げられたように感じた。
「私は……『天使長』とか『クール』とか『冷静沈着な』とか『気品のある』といった――形容詞のついたルシフェル様が好きなのではなく、――あ、いや、もちろん、そういうルシフェル様も確かに素敵ですが――、私は……何も飾らないルシフェル様のほうが――好きです。いろいろなルシフェル様を、お側で見てみたいと思います。そして、今私の目の前にいるルシフェル様に、会えなくなると言うのであれば、その前に――今のあなたの全てを知りたいと……思います」
ミュウはルシフェルの腕の中で、恥ずかしそうに眼を伏せて、最後の言葉を口にした。
「……ありがとう、ミュウ」
ルシフェルは、自分が――唯一、彼女の前では、つい素の自分を出してしまうのは、彼女が、『ルシフェル』そのものを受け入れようとしてくれていたからだと理解した。何のイメージにもとらわれず――だからこそ、もっと大きな可能性が広がるのかもしれない――と思う。
ミュウ、お前が側にいてくれたら――オレは、いつでも『オレ』のままで、いられるのかもな。
ふと、ルシフェルはそんな風に考えた。
「心も、体も……お前の全てをオレのものにしたい。――そのためなら、オレは、これから先、この身も心もお前に捧げると、誓おう。――来いよ。寝室で、たっぷり愛してやる」
いつもの自信家で意地悪な瞳のルシフェルであったが、そこにはもう切なさは微塵もなく、むしろ、まっすぐに己の気持ちに向き合う強ささえ感じられた。

そして、地に降りる天使

ルシフェルの準備が完了した数日後、彼は、数名の仲間とともに魔界へ降りることになった。

見送るのは、武装したミカエルの部隊。剣が打ちあわされるたびに、美しい光があたりに舞う。それは、離れている者にとっては、激しい戦いに見えたことだろう。しかし、魔界へ堕ち行く彼らの本当の目的を知るものにとっては、戦友を見送るための壮麗な儀式であった。

『光の天使』と『正義の天使』の熱い戦いは、人間界からも魔界からも窺うことができるほど、激しく美しいものであり、後々語り継がれていくことになる。

お前がいない間、ここは俺に任せろ。――だから、思う存分やってこい。……お前の凱旋を待っているぞ――。

その思いを口にすることなく、代わりに剣にこめて、ミカエルは最後に大きくそれを振り下ろす。そして、自ら罪をかぶり、多くの者たちからの誤解を背負ったまま暗い闇の奥底へと落ちていく彼らの後ろ姿に、ミカエルは剣を捧げて敬礼した。

ミカエルと派手に剣を交えたルシフェルの堕天は魔界でも大きな話題となった。

その話を部下から聞きつけたサタナキアは、食事の途中であったにもかかわらず、ナイフとフォークを置き、にやりと嗤って席を立つ。

「元天使長を倒したとなれば、箔がつくというもの。魔界の王の座も、夢ではない。――すぐに、支度しろ。やつを迎え討つ！」

サタナキアが広く天を臨める丘に兵を集め天使界での戦況を見つめていると、続々といくつもの軍隊が終結してきた。

「――ルキフゲ、お前もか――」

その中に顔見知り――宿敵の将軍を見つけたサタナキアは早速声をかける。
「私だけではない、見ろ――」
魔界では彼らと同じように、『ルシフェルを倒して我こそは王に』と考える魔将が、それぞれの軍隊を率いて、彼を迎えようとしているところだった。
「――ふ、考えることはみんな同じか――。一時休戦だな。……あいつの首は、早い者勝ちだ――」
そう言いながらサタナキアが飛び立ったのを合図に、戦いの火蓋は切って落とされた。

どのくらい戦っただろう。一つ倒せば、次が、そして、また次が――と敵が現れ、倒した数さえ分からなくなっていた。はじめは一丸となって天使の部隊に一斉攻撃をかけていた魔界の兵士たちであったが、にわかに生まれた結束など時間がたてば薄れていく。もともとは敵同士であるため、そのうちどれが敵でどれが味方なのかわからなくなる者まで出る始末。
これ以上やっても埒が明かん。首領さえ押さえれば、後はなんとでもなる――か。
そう判断した一際美しい堕天使軍のリーダーは、雑魚を避けながら、ひときわ目立つ馬に乗っている派手ないでたちの一人の魔将の元を目指した。
一瞬の隙を付かれたのか、それとも、もともと彼にかなうほどの能力を持ち合わせていなかったのか、ルキフゲは、気がつくと後ろから天使に羽交い絞めされ、喉元に剣を突き付けられていた。
「オレに従え――。悪いようには、せん」
耳元で冷たくて鋭い声が響く。
「わ、私にどうしろと――？」
喉に付きつけられた剣を見ながら、ルキフゲは相手にできるだけ動揺を見せないように答えた。

「オレに、忠誠を誓え。――でないと、今ここでお前の首を落としても構わない。……どちらにしろ、オレはお前の軍隊を手に入れるがな――」
くくっ――と笑って天使はルキフゲの首に剣の先を少し食い込ませた。食い込んだ剣を伝って、紅い血が一筋、乱れた線を描く。
「……わかった。言う通りにするから、――剣を納めろ」
命あっての物種だ。ルキフゲは降伏を決意し、潔く馬から降りる。
「今ここで、オレに忠誠を誓えないやつは、出て来い！　――思う存分、相手をしてやるぜ」
顔の前に構えた剣を舐めながら、艶やかに嗤うその美しく危険な天使に、そこにいた全てのものが、背筋を震わせ戦闘の手を止めた。
その彼がまたがっている馬は、サタナキア、アガリアレプトらと魔王の地位を争っていたルキフゲが先ほどまで乗っていた馬である。その光景に、全てのものがルキフゲの降伏を理解した。
その彼が、いともあっさりと降伏したとなれば――。
すでに、漆黒の羽を広げてルキフゲの馬を操る天使に、逆らう者など、いなかった。

ほんの少数の天使たちを引き連れて魔界に舞い降りた美しい天使は、階級制度を整え、彼らの軍隊を整備しなおした。また、彼らに自分の居城――パンデモニウムの建設を命じることで、いままで争いに費やしていた時間を労働時間に変え、リーダーを中心にチームで動くことを覚えさせる。
そして、これまで混沌としていた魔界に、規律と自尊心という光が差し始めた。

そして、地に降りる天使（後書き）

読んでいただいて、ありがとうございました。

読み直してみて、突っ込みどころ満載で、直したいところはたくさんあるのですが、ま、それはそれで、いいかなぁと。

ルシフェル／ルシファーのオレ様ぶりをもっと書きたかったのですが、ミュウと絡むと、とたんに素に戻ってしまって、全然オレ様ではなくなってしまいました。

これについては、私もとても不本意なので、そのうち、ミュウが出てこないルシフェルかルシファーのお話を書きたいなぁと思っています。

このお話を書いているうちに、次から次へと描きたいものがあふれてきました。

少しずつ、それも、書いていけたらと思います。

……しかし、ラファエルをこんな風に描いてしまってそれだけは、とても申し訳ない気持ちでいっぱいです。

でも、個人的にはとても好きなキャラになりました。

オレ様とオネェの好きな美羽の次のお話も、お楽しみいただければ

と思います♪

それでは、また、ご縁がありましたら――。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7519k/

地に降りる者

2010年10月8日13時56分発行